

2014年度-2015年度研究活動報告書

「持続可能な地域社会創り」を支える論理体系づくり

—「環境」・「経済」・「社会」の論理統合を通じて進める私たち柏の環境未来都市創り—

市民環境研究会の過去十年間の歩みを振り返りつつ

2016年3月

NPO 法人かしわ環境ステーション 温暖化対策部会
環境未来都市研究分科会

＜目次＞

はじめに.....	3
第Ⅰ章 私たちの「環境未来都市かしわ」の実現に向けて	5
第1節 国連ハイレベル・パネルの鳴らす重大な警鐘に耳を傾ける	5
1. 重大な決意をもって求められる環境問題への対応	6
2. 私たちの「これまで流の生き方・考え方」にまで ^{さかのぼ} 遡って反省を求める今日の環境問題	7
3. 新たな政治経済学の構築に向けて求められる私たちの思考の大転換	8
第2節 極めて困難な地球環境の時代に未来に向けた私たちの希望の地域社会を拓く	9
1. 今日の環境問題への対応と持続可能な地域社会創りの基本となる構図を考える	9
2. 私たちの地域社会が目指す「環境未来都市かしわ」創りに向けた道筋を示す	11
3. 「環境未来都市かしわ」の理念を実現するために展開する諸施策を考える	13
第3節 私たちの目指す「環境未来都市かしわ」創りに鍵となる論理を顧みる	15
1. 「環境資源」の概念をもって発展させる持続可能な地域社会創りの論理	15
2. 「モード2の科学」で進める環境未来都市創り	17
3. モード2の科学で進める環境未来都市創りの論理に活用する各種「思考形態」	19
4. 「環境リスクマネジメント」の概念を活用した環境未来都市創り	22
第4節 「住民参加の環境監査」をもって巡らせる環境未来都市かしわ創りへの想い	25
1. 「環境デモクラシー」の考え方を基盤に進める環境未来都市創り	25
2. 市民参加の環境監査は市民の「志」・「責任」・「英知」を育むプラットフォーム	27
3. L A S - E 制度に学ぶ市民参加の環境監査の実務	28
第Ⅱ章 テーマ「環境未来都市かしわ創り」の市民研究活動を顧みる	30
0. 2006年度環境シンポジウム報告書	31
1. 2006年度活動報告書	34
2. 2007年度活動報告書	38
3. 2008年度活動報告書	42
4. 2009年度活動報告書	46
5. 2010年度活動報告書	49
6. 2011年度活動報告書	52
7. 2013年度活動報告書	55
おわりに	59



はじめに

私たちの「市民環境研究会」は、今日に私たちが抱える環境問題という問題の大きさ、深刻さ、さらにはその回復の困難さを顧みて、対応についての現状を憂い、市民自ら直面する問題の本質を見つめたうえ本格的な取り組みを進めたいとして、2006年6月に活動を始めました。

私たちは、研究や実践活動を通じ目指そうとする「ゴール」を、「持続可能な地域社会づくり」が優先される「環境未来都市かしわ」と名付けました。柏市民の皆さんに私たち自らの問題として身近に感じていただいたうえ、大勢の皆さんに活動に加わっていただきたいという思いからです。

「環境未来都市かしわ」の姿を、より具体的、詳細に描くため、私たちは月例のワークショップ、環境セミナーや勉強会、「WEB 勉強会」を重ね、環境問題の理解を深めました。また外部で開催されるセミナーや講演会へも積極的に参加して、学者や専門家の論文、政府機関、NGO の報告書などを通じて研鑽に努めました。

このように積み重ねてきた活動も、2016年6月に丸10年を迎えます。そこで、私たちはこの機会に10年に及ぶ活動を振り返り、環境のまちづくりに係る論理を包括的にまとめてみることにしました。

ゴールとする「環境未来都市かしわ」実現に向けて道のりはるかかなたの段階ですが、次の10年における私たちの活動を飛躍的に進展させるためにも有意義だと考えました。

本報告書は以下の2章立てとし、第I章で「環境未来都市かしわ創り」に活用する論理を体系的に整理しました。私たちが主張する持続可能な地域社会創りの論理の背景について理解を深めていただける一助となると思います。

第II章では、私たちの過去の活動の全容を紹介しました。

昨今の世界的な異常気象に象徴されるように、私たちが抱える環境問題への対応はもはや待ったなしの状況です。こうした環境問題に取り組むには、私たち市民が強い「想いと覚悟」をもって進めることが不可欠であるとする私たちの論理を、多くの市民の皆さんにも共有いただきたいと思います。是非ご一読いただき、皆さんとさらに論議を重ねさせていただけることを強く希望します。

第Ⅰ章 私たちの「環境未来都市かしわ」の実現に向けて

— 当地の持続可能な地域社会創りの実践に向けた私たちの提言 —

今回の報告書は2つの章で構成します。後の第Ⅱ章で私たち市民環境研究会の過去の研究活動内容を振り返っています。本第Ⅰ章においては、第Ⅱ章の内容の基礎となっている当地柏の持続可能な地域社会創りのための論理を紹介します。

1章の第1節では、現下の世界の環境問題への対応の論理を主導する国連ハイレベル・パネル報告書の内容を振り返ります。第2・3・4節において、私たちがこれまでに構築してきた環境問題への対応、持続可能な地域社会創りのための論理、これらの論理を発展させるための科学の進め方、当地柏で持続可能な地域社会創りへ踏み出すためのステップとなる具体的な提案をまとめました。

第1節 国連ハイレベル・パネルの鳴らす重大な警鐘に耳を傾ける

国際連合は、藩基文事務総長が主導して2010年に「地球の持続可能性に関するハイレベル・パネル（以下「GSP」）」を設立しました。国連事務総長は専門家の資格で行動するGSPメンバーに対し、「持続可能な成長と繁栄のための新しいビジョン、およびその目標達成のためのメカニズム」の策定を求めました。

GSPは6回の会合を積み重ね、2012年に報告書をまとめ公表しました。「強靱な人々、強靱な地球：選択に値する未来」と題されたこの報告書は、近未来にも環境問題が私たちの生活の営みに大きな困難をもたらす懸念について警鐘を鳴らすとともに、社会の発展を支えてきたこれまでの科学のあり方に疑問を呈し、科学的な考え方の枠組みそのものの転換を迫っています。

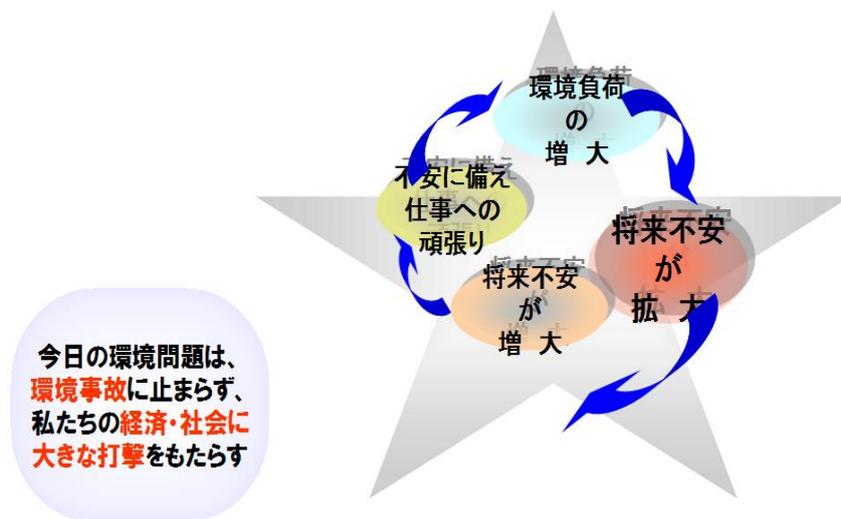
私たちの「市民環境研究会」では、2014年度・2015年度における研究活動の一環としてGSP報告書を参照しつつ、現在進められている環境問題への取り組み全体を点検し、その評価を試みることに努めました。

このGSP報告書への理解を深める作業は、私たちにとって環境問題への取り組みにおいて提言してきた「持続可能な地域社会創り」の論理の基盤となる考え方を再点検する絶好の機会となりました。

GSP報告書は、世界中の人々が豊かさを求めて懸命に努力するなかで、こうした人々の真摯な営為（日々に営む仕事や生活）が、皮肉にも環境問題をより深刻化させている

としています。私たちの豊かさを目指す活動が拡大すればするほど、環境を悪化させ、社会そのものの持続性を危うくすると訴えています。

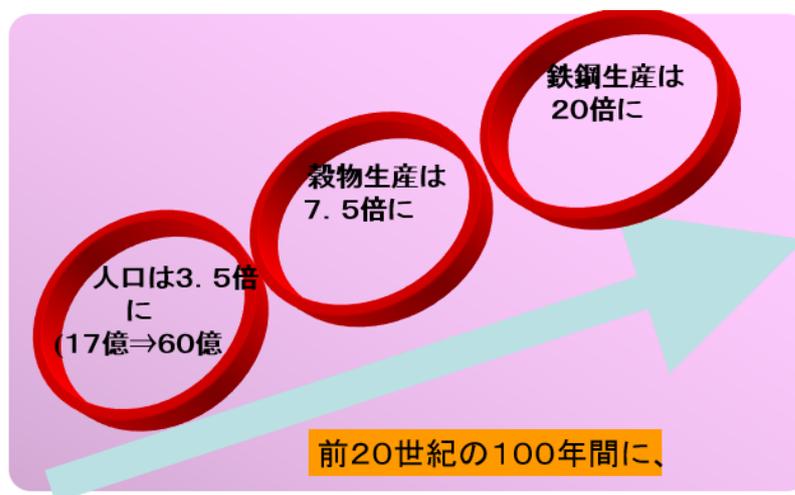
図 「これまで流」の私たちの環境・経済・社会が織り成す『負のスパイラル』



1. 重大な決意をもって求められる環境問題への対応

G S P 報告書は、「2040年までに、世界の人口は70億から約90億まで増加し、中流階級の消費者数が今後20年間で30億人増える（斜傾文字部分はG S P 報告書からそのまま引用、以下同じ）」と予測、「2030年までに、世界は少なくとも現在より50%以上の食料、45%以上のエネルギー、そして30%以上の水が必要」になるとしています。

図 急速に拡大を続けてきた私たち人類社会の活動の規模



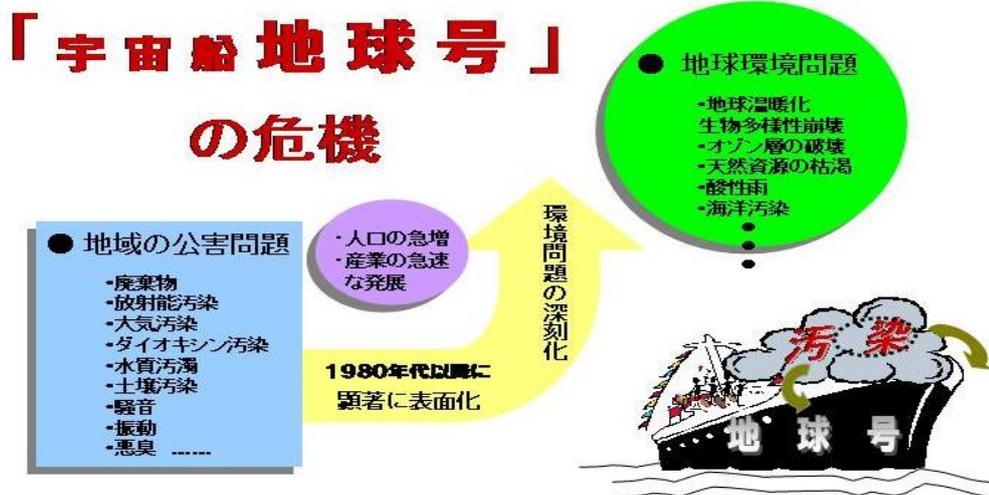
G S P は、人類が地球環境に与え続ける負荷により、私たちの生命や生活を支える

のに欠かせない「食料」、「水」、「エネルギー」と云った基礎的な物質の供給にすら大きな制約が加わる時期が2030年といった近未来にも訪れることを危惧しています。さらに気候変動がそれらの供給を一層難しいものにするとして、現在と同じようにそれらを手続き続けることを期待する楽観的な考え方に大きな疑問を投げかけています。

私たちは、人類を育んでくれる私たちの母なる大地、この地球が生み出す恵みを食欲に消費することで経済成長や開発を続けてきました。しかし、これまでは強靱に観えた地球もここにきてあえぎを見せ始めるようになり、許容量をはるかに超えて地球からの恵みを食いつぶし続ける私たちの生活に警鐘を鳴らしています。

さらに「今日のグローバルな開発モデルは、持続可能ではない。エコシステムと人間共同体の両方に不可逆的な（取り返しの利かない）損傷のリスクを伴うほどに環境の限界値が侵害されている」とし、人類が繰り広げる営み、地球の自然の営み双方が破滅に至るのを止められなくなる（不可逆的）状況へ突き進むことに対し、強い危機感を表明しています。

図 今日の問題が地球規模で生み出す社会の持続性崩壊の危機



2. 私たちの「これまで流の生き方・考え方」にまで^{さかのぼ}って反省を求める今日の環境問題

国際連合の「環境と開発に関する世界委員会」（WCED = World Commission on Environment and Development、後にノルウェー首相になったブルントラント氏が委員長を務めたことから「ブルントラント委員会」と通称される）が1987年に発行した最終報告書“*Our Common Future*”（邦題『地球の未来を守るために』、通称「ブルントラント報告」）は、「持続可能な開発」という概念を国際社会に訴えました。

今日の環境問題を根本に遡って考える



それは経済成長、社会的平等および環境の持続可能性を共存させる新しい概念の枠組みでした。

G S Pが問題としたのは、この「持続可能な開発」が概念にとどまったまま、未だ日常的な地に足のついた実践となっていないことです。G S Pはこの原因を究明し、どのような方策を用いれば、「持続可能な開発」が履行されるかを議論しました。

G S Pは「*持続可能な開発は、疑いなく政治的意思の欠落に悩ませられてきた*」とし、その原因として、「*持続可能な政策がもたらす利益は長期的であり、しばしば世代間である*」のに対し、「*我々の政策、政治および制度が目先のことを優先する今、持続可能な開発を優先するインセンティブがほとんどない*」からだとしています。

また、「持続可能という概念」が「*国家的および国際的な経済政策の議論の主流に編入されていない*」とし、「*ほとんどの経済的な意思決定者はマクロ経済の管理およびその他の経済政策に対する自己の中核的責務のなかで、持続可能な開発は無関係であるといままでに考えている*」と根本にある問題の所在を明らかにしています。

G S Pは、こうした状況を打破し「持続可能な開発」が優先されるために「国際社会は持続可能な開発を目指す“新政治経済学”を必要とすることを主張」しています。

3. 新たな政治経済学の構築に向けて求められる私たちの思考の大転換

G S Pは、持続可能な開発という枠組みを経済学の主流に取り込むため、「*経済学者、社会活動家、環境科学者が長い間互いにすれ違いの議論を続けてきたことをやめ、専門分野を統合し対立する陣営を超越する“持続可能な開発のための共通言語”を開発する時期が来た*」と宣言しています。

「多くの学者や専門家は自己の研究分野に閉じこもり、他者の批判に耳を傾けないばかりか、専門的、科学的というという名の下に批判さえ許さない」、「専門分野をいたずらに細分化させ、研究をより専門化すること目的化する」ことの悪弊を指摘し、このような悪しき傾向がさらに進んでいる現況を、G S Pは厳しく糾弾しています。

G S P報告書は、「*我々は、科学を通して、科学者が『地球の限界』、『環境の限界値』、『(限界を超える)分岐点』と呼ぶものが何であるのかを定義しなければならない*」と述べ、まず“新政治経済学”構築の基礎となる科学的イニシアティブの立ち上げを迫っています。

「*環境的限界によって、供給に対する新しい制限が加えられる時期*」に私たちは生きているのです。そのため、G S Pは、無限の進歩を前提とした「近代という時代の思考の枠組み」にまで変革を求めています。これまで流の私たちの豊さの求め方、豊さを考える価値基準、暮らしのあり方に対して根本的な見直しを迫っています。

G S Pは私たちが抱える現在の環境問題の深刻さとその対応への難しさを説いています。その上で、「持続可能性を実現するために、開発の経済的、社会的および環境的側面の統合」を訴え、「*三本の柱（環境・経済・社会）を内包する統合的政策の枠組があれば、持続可能な開発は達成できる*」との確信を示しました。

G S Pは、世界中の政府に対し、「*今日の環境が社会の持続性まで危惧させるに及んでいる現状を直視し、持続可能な開発を議題や予算の中で最優先*」すべきと訴えています。

しっかりとした予算の裏付けを得たうえで、「環境」、「経済」、「社会」の3つを統合した政策を新たに展開することの必要性を強調し、環境および経済社会政策における大転換を、世界中の中央および地方の政府に迫っています。

第2節 極めて困難な地球環境の時代に未来に向けた私たちの希望の地域社会を拓く

1. 今日の環境問題への対応と持続可能な地域社会創りの基本となる構図を考える

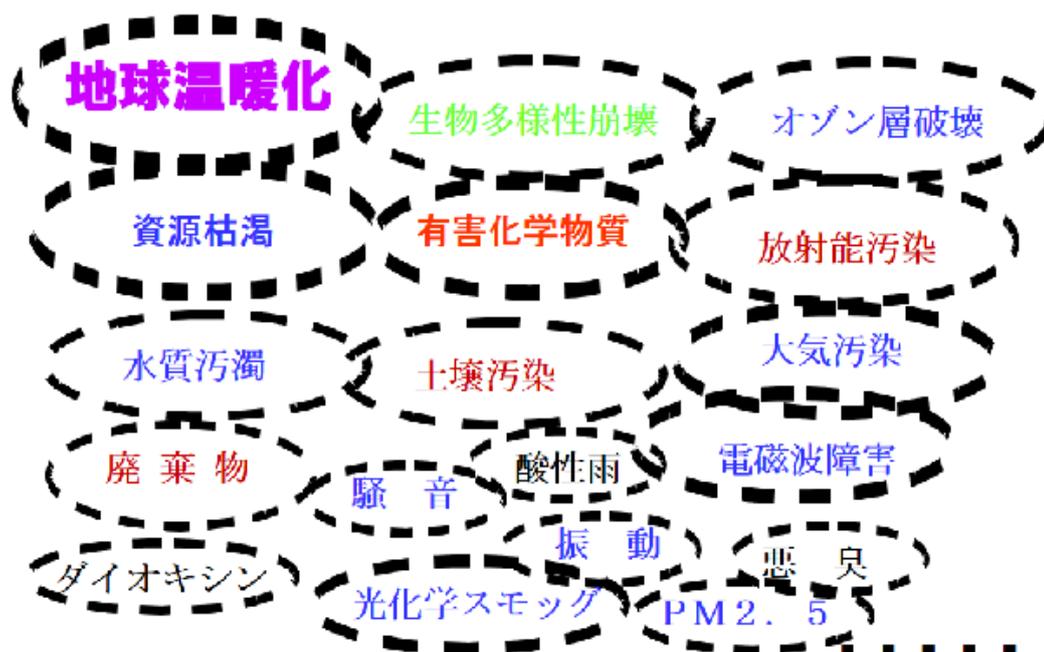
昨2014年度と本2015年度において、私たちは過年度の活動成果を振り返り、私たちが今日に抱える環境問題の特性や深刻化する問題の意味を見つめ直しました。そのうえで、私たちが主張する持続可能な地域社会（環境未来都市かしわ）創りの論理を体系化し整理することを試みました。

これまでの私たちの作業を客観的に見直すため、第1節に取り上げたG S P報告書を詳細に点検し、議論を交わしました。この議論を通じて、私たちが今日の環境問題への取り組みにおける最も重要な視点と主張してきた「持続可能な地域社会創り」の考え方は、G S P報告書の問題意識とももの見事に一致していることが確認できました。

G S P報告書は「*持続可能な開発を達成するためには、地方、国家、地域そしてグローバルなレベルで、効果的な制度の枠組と意思決定プロセスを構築する必要がある*」とし、「*市町村は、現場での持続可能な開発を実際に推進する上で主要な役割を果たしうる*」と述べています。さらに、「*持続可能な政策の概念化、策定および執行において、地域コミュニティが積極的かつ継続的に参加*」すべきことを説いています。

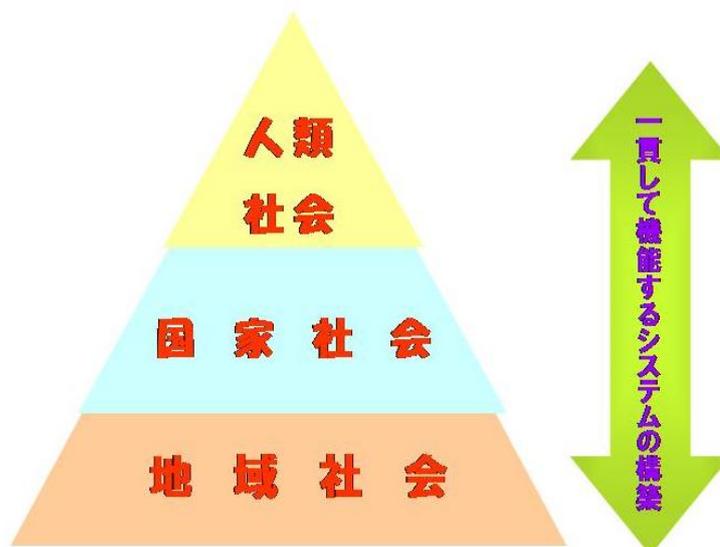
私たちは今日、地球温暖化をはじめとしてオゾン層破壊、有害化学物質や廃棄物の越境移動、天然資源の枯渇など、人類社会規模で相互間の関連性を考えながら対応を要する数多くの環境問題を抱えるようになりました。

図 今グローバル化を伴って深刻化し続ける私たちの抱える各種環境問題



こうしたグローバル化（Global：地球規模に拡大）した現在の環境問題ですが、上述のGSP報告書にも認められるように、私たちはその具体的な取り組みにおいては、地域社会が主導すべきとする考え方を主張してきました。

図 社会全体が一貫して機能するシステムで取り組む持続可能な社会づくり



このような環境の時代にあっては、あるべき地域社会の姿を描く際には「生活世界で健全に育まれた感性」が基本となります。それぞれが生活している地域の特性を踏まえつつ、持続性を追求するという「地域社会創りの論理」を確立していくべきであると私たちは考えてきました。こうした「地域社会」の考え方が、社会構造として上位にある「国家社会」、「人類社会」をリードし、一貫性ある社会システム（社会全体として機能する仕組み）を備えた持続可能な社会創りを進めるべきであると、私たちは主張し続けてきました。

2. 私たちの地域社会が目指す「環境未来都市かしわ」創りに向けた道筋を示す

環境問題への取り組みに関連しての一般的な表記は、多くのメディアが取り上げているように「持続可能な社会づくり」ですが、これに対し、私たちは「持続可能な地域社会創り」と表記します。

持続可能な地域社会「創り」は私たちに限らない創造性を求めます。創造力を働かせイノベーション（新たな価値創造）を起こすための英知を生み出すたゆまぬ努力が、私たち地域の住民に広く求められるとの考えに基づきます。

私たちの2014年度・2015年度にわたる本報告書は、過去の研究活動全体を振り返り、私たちの主張する論理を総括しました。今後の活動を展望していくのに不可欠な作業だと考えたからです。

第Ⅱ章で紹介していますが、私たちの市民環境研究会は当初、かしわ環境ステーション環境研究部会のなかに「環境未来都市かしわランドデザイン研究分科会」と云う長い名前で2006年に発足しました。

環境問題に取り組むには、「これまで流の環境政策、経済政策、社会政策を見直し統合したうえ、重大な覚悟をもって対応を進める必要がある」ことをGSP報告書は説いています。地域社会において先ず「環境未来都市かしわ」をランドデザインし、その実現を目指すべきとする私たちの考え方はGSP報告書と見事に一致しています。

このように考え方を発展させるなかで、私たちは先ず「夢と希望に満ちた地域社会像を示す」ことが大変重要なステップになると考えてきました。環境未来都市創りを目指すためには、この地域社会像が当地の市民に理解され共感を得ることが出発点となります。なぜなら、地域社会のすべての人々の積極的な関与がなければ、「環境未来都市創り」は一歩たりと進んでいかないからです。

私たちは、夢と希望にあふれた「持続可能な地域社会（環境未来都市かしわ）像とそ

の実現への道筋を包括的に描く（グランドデザインする）」という重い役割を担いたいのとの思いから環境研究活動を始めたのです。

私たちは自ら研鑽を深める一方、多くの方々と議論を積み重ねました。このような作業を通じ、当地柏で目指したいとする「環境未来都市かしわ」の概念を下図のように描きました。

地域社会の持続性を確立するためにモデルとしたい考え方を積み上げ、「概念」として図に示しました。そしてこの「概念」を描くなかで考えうる頂上概念である「理念」の下に、環境未来都市かしわ創りを進めるための3つの階層を据えながら、全体として4層の概念構成にしました。

図 私たち市民環境研究会が探求したいとする「環境未来都市かしわ」像



かつて歴史上でも経験したことがない「持続可能な地域社会創り」に挑戦し、実現に向かうためには、後段の本章第3節のなかに示したように、「バックキャスティング (Back-casting)」の考え方 (思考の形態) が欠かせないと考えています。

最初に、私たちが夢と希望を託せる地域の将来像をイメージに描きます。そして、現下の状況と比較して足りない要素を埋めるための計画を立て、この計画を実行していくとする考え方です。概念図は、このバックキャスト思考を活用し、現在の私たちの知恵を結集して当地柏の持続可能な地域社会創りのあり様を階層化して描いたものです。

私たちの市民環境研究会は「環境問題を克服し、市民の持続性ある幸福の追求を可能にする（『グロス・かしわ・ハビネス』を最大化する）地域社会創り」を理念としたい、と提案しました。「持続性」の概念を重視することで単に現在の空間のみならず未来への時間を^{また}跨いで、当地市民の幸福の追求を最大に可能とさせる地域社会創りを理念に掲げました。

私たちは「持続可能な地域社会創り」を直説的テーマに掲げ地域社会で活動していますが、地球環境までに責任を負う時代に生きる私たちは、国家社会や人類社会としての環境問題への取り組みとの関係を常に念頭に置いておくことが不可欠です。

そのうえに、社会の持続性の探求にあっては、環境の世紀とされる社会観を念頭におきながら、私たちが求める地域のあり方は地球上の他の全ての地域のためにモデルとなり、持続性の探求をリード（Lead：主導）していく視点を持たなければならないと考えています。

私たちが当地で探求したいとする環境未来都市においては、将来世代を含む地域のすべての人々の「尊厳」が尊重され、「誇り」を胸に「誉れ」までを感じつつ「自然寿命を全う」できる社会が実現されることをゴールに描いて進めたい、と云うのが私たちの主張です。

この論理は、とりもなおさず「人類社会をリード」してゆくことになるかと確信します。

図で、頂上概念として示した環境未来都市かしわに求める理念が、以下の3階層に示す施策への展開を考える中核となる役割を担い、論理の構成のなかで最も重い意味を持ちます。そして、この理念づくりが私たちの「生活世界に健全に育まれた感性」を活かす最も重要なステップです。

私たちがまとめたこうした考え方をたたき台として、当地の市民社会において将来を見つめた真摯な議論が展開されていくことを期待してきました。

3. 「環境未来都市かしわ」の理念を実現するために展開する諸施策を考える

私たちが描く当地の持続可能な地域社会創りの概念においては、私たちは最上階層に据えた「理念」を実現するため、その下段に第1から第3に至る3つの階層概念を配しました。

環境未来都市の理念の実現に向けて、まず第1階層概念において施策を支える柱となる考え方を以下のように示しました。

- ① 「環境」、「経済」、「社会」を調和させながら発展させることができる地域社会
- ② 「歴史」、「伝統」、「個性」を護りながらも、みんなで共生できる地域社会
- ③ 「土」、「水」、「緑」に根付いて落ち着きのある文化を^{はぐくむ}地域社会
- ④ 「安心」、「安全」に支えられ「質」と「実」が備わった地域社会
- ⑤ 「自主」、「自立」、「自律」の3つの‘自ら’の精神に基づく生き方を確立した地域社会
- ⑥ 尊厳を感じ当地柏に生きることを誇りとしながら、「地域に対する限りない愛着」を人々の心のなかに育んでくれる私たちの故郷となる地域社会

当地柏において、私たちが真の「誇り」と「幸福感」を抱いて生きていく、自身の「尊厳」を保持し続けながら、私たちそれぞれが一生を「命いっぱい燃やし尽くせる」ことのできる地域社会をイメージしました。

第2階層概念では、第1階層に示す考え方を、柏の経済社会システム（経済社会を動かす仕組み）に生かすための取り組み目標を以下のように列挙しました。

- ① 誇り高い地域の環境思想と文化を形成する教育の推進
- ② ‘モノ’と‘お金’の域内循環の確保
- ③ ‘儉約・健康・謙虚’の「3ケン」の実践行動
- ④ 地産地消をベースに「食の安全保障」の確立
- ⑤ 自然エネルギー中心に「エネルギー安全保障」の確立
- ⑥ 「環境ビジネス」を中心とした職業機会の増大
- ⑦ 持続的に幸福追求を支える地域経済・社会システム創り

第3階層概念は、第1、第2の階層概念を通じて発展させた考え方をもとにして、環境政策、経済政策、社会政策を統合的に進めるべき具体的な諸施策について試案を示したものです。私たちの柏の特性を考慮しながら、充分効果の見込める施策を示すことができたと思います。

首都圏にあっても自然豊かな当地の特性を生かし、手賀沼周辺に「協働集団居住エリア」を創出したいとする考えを発展させた「てがぬま遊トピア」構想では、高齢化社会対策、社会的弱者に対する社会保障の拡充、環境ビジネスの創出、真に心触れ合うコミュニティの回復、自然環境の回復—と云った重層的施策を包括的に推進することを狙いとしています。

また、「ふれあいサイクルタウン」構想は、2050年を目指した長期都市計画の下に、地域住民が必要とする医療・介護、学校、公共サービス、ショッピング、娯楽などが身近に利用できるコンパクトシティへ都市構造を転換していくと云う考え方です。

これまでの時間に追われる生活スタイルを転換し、スローライフ、LOHASを基調として人は歩くことを基本としながら、街での交通手段は自転車を主体とし、公共交通を補助的に加えたものとします。人が歩いて移動することは人々の交流につながり、お互いの連帯感を強めます。こうした連帯感の増加は、街の犯罪を激減させるでしょう。

その他のものを含め私たちから例示した環境未来都市創りの施策案を参考に、市民社会で活発な議論が展開され、さらに優れた施策案が生み出されていくことを期待します。

第3節 私たちの目指す「環境未来都市かしわ」創りに鍵となる論理を顧みる

私たちは、「環境未来都市かしわ創り」を探求するなかで、さまざまな次元、分野、側面から幅広く考えを巡らせてきました。そして、私たちの持続可能な地域社会創りの論理を発達させていくうえで、以下の考え方が大きな役割を担ってくれると考えています。

1. 「環境資源」の概念をもって発展させる持続可能な地域社会創りの論理

私たちの市民環境研究会では、今日の環境問題の深刻化を止め、流れを反転させるためには、根本に遡って問題の本質を探究すべきと考えてきました。そして、この環境問題の本質を見つめ直す作業は、近代科学の抱える欠陥や限界をあからさまにする一方、自然の織り成す営みがいかに優れたもの、偉大なものであるかと云うことを再認識させました。



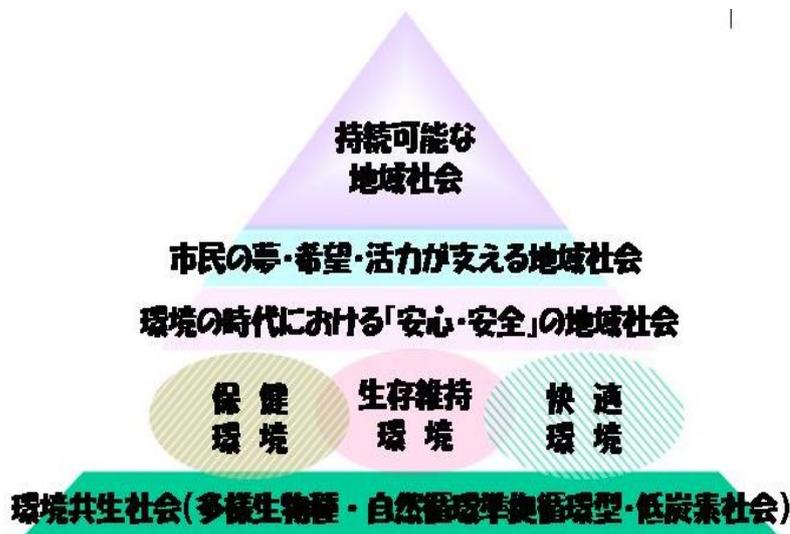
こうした畏敬の念をも伴った自然観（私たちを取り巻く自然に対する観方）の下に進める環境問題への取り組みでは、『環境資源』と云う概念が大変役に立ちます。

私たちの母なる大地である地球は、地下に眠る天然の「エネルギー資源」や「鉱物資源」、地上の「森林資源」、漁獲物ほか海からの恵みの「海洋資源」など“資源”と称される対象物を生み出してきました。こうした対象に加えて、私たちを取り巻く動物、植物などの豊かな「生命群」、さらには「澄んだ空気」、「清らかな水」、「汚れのない土壌」といった私たちの“生”を支える自然が創り出した基礎物質までを包括し、今日の環境問題への取り組みを考えるうえで鍵となる重要なものとして、私たちは特に『環境資源』と呼んでいます。

「環境資源」の考え方は、「環境」・「経済」・「社会」と云った私たちの生活を構成する要素のすべてを包含して論理を統合し、発展させるための基礎となるものです。

そして、地域社会の持続性を探求し、環境、経済、社会の諸要素を統合した新たな施策を創出していくためには、これまで流の「環境資源食いつぶし型」で豊かさを求めるあり方を大転換することが必要です。

図 「自然循環準拠循環型社会」の概念をベースに進める持続可能な地域社会創り



この考え方に基づけば、当地が目指す持続可能な地域社会創りとは、自然システム（自然の営む機能上の仕組み）に調和した経済社会システム（経済社会に営まれる機能上の仕組み）を築き上げることにほかなりません。自然が営む物質循環のシステムに寄り添い、準拠しながら経済社会での物質循環のシステム創りが新たに構築されることが必要です。

こうして目指す経済社会システムが創り出す持続可能な社会を、私たちは「自然循環準拠循環型社会」と呼んでいます。自然循環に準拠しながら、私たちが生活するうえに必要な物質や豊かさづくりに役立つものを創出、生産する仕組みを築くとの考え方を採ることにより、持続可能な地域社会創りに向けた効果的な施策が創出できるはずです。

2. 「モード2の科学」で進める環境未来都市創り

私たちはこれまでの活動を通じ、環境問題への対応、持続可能な地域社会創りに関わる考え方を勉強し、論理を発展させようと研鑽を積んできました。その過程で、環境問題の本質的、本格的な取り組みのためには、私たちが豊さを求める「思考のあり方」にまで遡ったうえ、根本的な反省を加えなければならないとの思いに至りました。

何か問題が生じて、その対応のために深く考えを巡らせ答えを得たいとするとき、私たちは目前の要素を細かく分けながら解決に向けての道筋を探ろうとします。いわゆる対象とするものの細分化を通じて真理を探究し、問題解決に結び付けようとする「要素還元主義」と呼ばれる考え方に陥りがちです。

私たちの社会は、要素還元主義に依拠した知識をもとに豊かさの実現を図ってきたといえるでしょう。近代文明を主導してきた近代科学は、要素還元主義に基づく科学が優先されてきたためです。

この要素還元主義がリードする科学は文明の発展を促進して、私たちの社会に豊富な物資を供給し人口の爆発的な増加を実現しました。こうした近代科学は、社会の発達を支えるために不可欠なものと考えられてきました。

しかしながら、環境問題が私たちの生存までを脅かすように深刻化し、経済、社会の分野においても複雑な諸問題を生み出すようになった今日、社会を支える近代科学が抱えてきた重大な欠陥を直視しなければなりません。

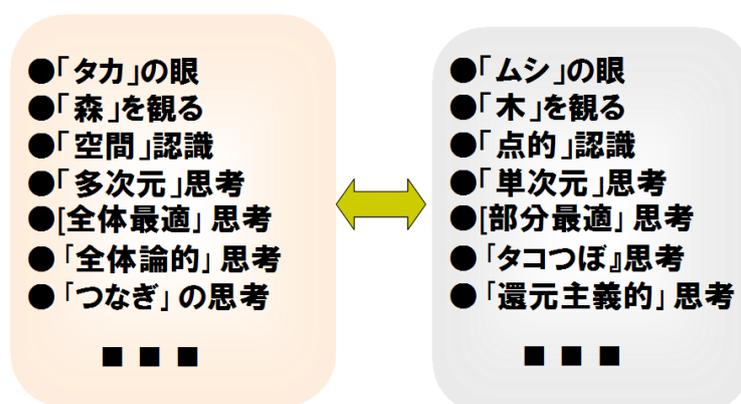
要素還元主義がリードする今日の科学は、社会構造を構成する分野の概念についても細分化を進めてきました。さらには、この細分化された社会の各々の分野を構成する個々の要素に関しても、限りなく細分化した知識を探求し続けるものになりました。こうした結果、現在社会は限りなく広がり続ける分野において、際限なく知識を増殖させるという仕組みを発達させることとなり、そのため、私たちは「爆発する知識」の時代に生きると言われるようになりました。

そして、社会において無限に増え続ける知識は、それぞれの分野で私たちの豊かさづ

くりに貢献しているはずだと考えられてきました。しかし膨らみ続けて社会のなかに渦巻く膨大な知識は、私たちに与える影響に対して私たちのコントロール能力を急速に奪うことでさまざまな不都合を生み出す皮肉な結果をもたらすことになりました。

こうした近代科学の反省に立って、環境問題の解決を目指すためには問題の発生した背景にある要素、それと関連する全ての要素を俯瞰し、これら要素間の関連と関係性から生まれる機能上のバランスを考えながら進める知識の創出、生産としての科学が希求されるようになりました。

図 私たちに今求められる‘ものごと’を「俯瞰する力」



1994年にマイケル・ギボンズ (Michael Gibbons) ほか数名の学者が、このような考え方を「モード2の科学(第2の思考様式をもって進める科学)」として発表しました。わが国においては、「現在社会と知の創造—モード論とは何か—」との表題の訳本が出版されており、私たちにモード2の科学の考え方への理解を促しました。

マイケル・ギボンズは、これまで主流となってきた、いわゆるディシプリン (discipline: 環境科学、物理学、化学、経済学、社会学など専門分野に区分された個々の学術) がリードしながら必要な知識を創出、生産する「モード1の科学(第1の思考様式をもって進める科学)」に偏ってきた私たちに反省を求めています。

経済社会の活動が著しく拡大するなかでますます複雑に多様化した要素を包含し拡大し続ける各種の問題に対して、各々の分野で進む個別の学術のなかで発達させた成果を単に寄せ集めて最良の解を得ようとする試みが、結果として大きな不都合を生み出す元凶になっていることが浮き彫りになってきました。

社会のなかで複雑化して拡大する諸問題へ効果的にアプローチするためには、マルチ

ディシプリナリー (multidisciplinary : 関連する個別学術を集め全体を総合すること) をもって、インターディシプリナリー (interdisciplinary : 関連する個別学術を関連づけてつなぐこと)、さらにはトランスディシプリナリー (transdisciplinary : 既存の学術分野の枠を超え生活世界の科学までを含め異種要素をハイブリッド型に組み合わせで一層大きな成果を生み出すこと) のための思考様式が希求されるようになりました。

私たちの知的能力の大いなる限界を前提としながら、科学の成果の最大活用を目指そうと、前に紹介したG S P 報告書は「*経済学者、社会活動家および環境科学者は、これまであまりにも長い間、互いにすれ違いの議論をつづけてきた*」として、「*専門分野を統合し、対立する陣営を超越する持続可能な開発のための共通言語を開発する時期が来た*」と述べ、既存の学術分野を統合したうえで新たな科学を創出することを求めています。

G S P が「持続可能性を実現するために、私たちの社会における開発の経済的、社会的小および環境的側面を統合する必要性」を訴えたことは、環境問題への取り組みにおいて求められるこのモード2の科学を活用することの緊急性を象徴しています。

3. モード2の科学で進める環境未来都市創りの論理に活用する各種「思考形態」

本報告書の第II章で、私たちはモード2の科学が主張する「思考様式」を基に、過去の環境研究活動で紹介した報告書を再点検しました。このなかで、環境のまちづくりのための実践に向けた論理を構築していくうえで、モード2の科学の考え方を効果的に活用できると考えた幾つかの「思考形態」を以下に紹介します。

図 モード2の科学を効果的に進めるための思考形態



『① バックキャスティング』

後の第Ⅱ章の冒頭に紹介する「環境シンポジウム」において、私たちはパネリストとして外部から参加した有識者から、『①バックキャスティング (back-casting)』の思考形態を取り入れることにより、環境のまちづくりを効果的に発展させられることを教わりました。

最初に、目指す未来社会の姿を描きます。この姿を現在の状態と比較して、足りない部分は何であるのかを見極めます。そして、足りないものを埋めるための計画を立て実現に向けた行動につなげます。既存の知識を基に積み上げて未来のあり様を描いていくフォアキャスティング (fore-casting) に対応する考え方です。

環境シンポジウムにおいては、このような思考の展開を「未来を記憶する」という表現をもって説明いただきました。未来をどうしたいかを自分のデータの中に取り込めば、私たちの判断や行動は描いた未来に近づくように自然に変わっていく、私たちの脳がこのような構造になっている、と教えられました。

「環境未来都市かしわ」をグランドデザインすることは、この「未来を記憶する」作業に他なりません。

『②システム思考』

膨大な知識を効果的に活用するためには、『②システム思考』が大きな助けとなります。

無限とも言える関連要素に係る知識を「インテリジェンス化」、すなわち具体的な行動に結びつく知識へ転換する「形式知化」のプロセスがとても重要です。

私たちの社会を構成するあらゆる要素は、時とともに要素相互の間で影響し合いながら絶えず変化（動的変化）してゆきます。社会は、こうした性格をもつ多くの要素で構成されており、その未来のあり方を正確に捉えることは、私たちの人知（人の知的能力）をはるかに超えます。しかしモード2の科学は、社会に係る命題に対しても、人知を生かしながら最良の答えを導く考え方の基盤となります。

与えられた命題に関連する要素をつなぎ、ゴールとする目標を基準にこれら要素をバランスしながら構造化する（知識構造として創り上げる）知的所作が「システム思考」です。

『③階層思考』

社会を構成する要素をシステムとして捉える場合、膨大な要素を『③階層思考』の考

え方で整理することが効果的です。

環境未来都市創りを目指すことは、私たちの社会のあり方を考えることから出発します。社会とはあらゆる要素で構成され、さらに要素間の相互作用で変化し続けるものです。これを分析し理解するには、トランスディシプリナリーな科学、新たに生まれる「超学」とも呼べる科学をもって取り組まなければならないでしょう。

このような超学を構築していく作業では、各種分野についての分類とともに、階層概念を加えて関連する要素を整理していけば、新たに必要とする知識の創出、生産をより効果的に進めることができます。上記、第2節の2項において示した図、私たちの探求する「環境未来都市かしわ」は求める概念を階層化したものの一例です。

『④プライオリティ思考』

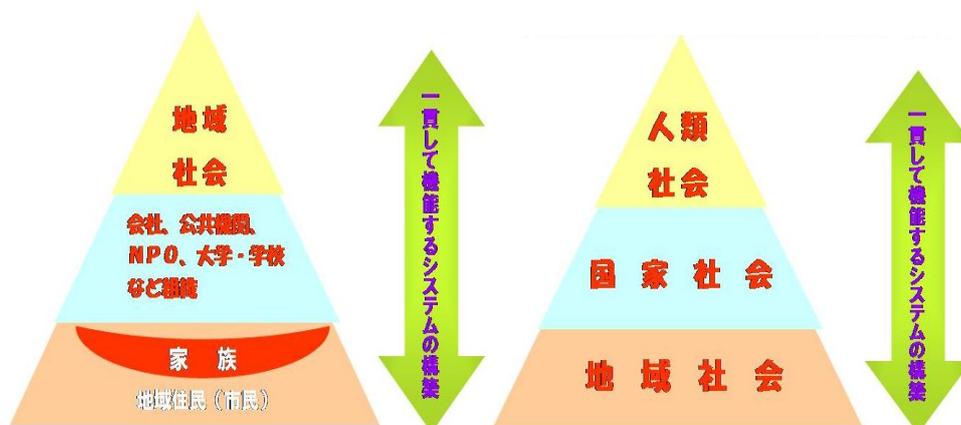
環境未来都市づくりに向けて、私たちは多くの判断すべき対象に直面し、多種多様な評価、価値判断を求められます。その場合には、『④プライオリティ思考』をもって対処することが重要です。

プライオリティ（priority：優先概念）の考え方で判断を導くことは、意義のある知的所作となります。この場合には、「私たち生活者の常識や感性」が基礎になることを忘れてはなりません。

『⑤全体論的思考』・『⑥目的論的思考』

関連する要素全体を俯瞰しながら科学を進めるには、『⑥目的論的思考』を備えておくことはとても重要です。

図 人類社会の構成要素全体が一貫して機能するシステム機能の探求



私たち人類は「持続性ある豊さの追求」というテーマを掲げています。その実現のために、人類社会を挙げて「モード2の科学に取り組んでいる」と言うことができるでしょう。

こうしたモード2の科学を効果的、効率的に進めるためには、上掲図のように、人類社会全体が目指す目的に向かって一貫したシステム持つことが必要です。そのためには、構成する概念階層のすべての分野で関わりをもつ人たちが、共通するテーマのために『⑤全体論的な思考』に基づく視野を備えつつ、目的論的な思考形態を備えて活動することが求められます。

『⑦戦略論的思考』

環境問題への取り組みにおける科学は実践の科学でなければなりません。私たちが、いざ当地に環境未来都市創りに向けた実践に踏み出すとき、『⑦戦略的思考』が大変重要となります。

限りなく広がりのある要素を考慮しつつ進める新たな地域社会創りにおいては、活用できる私たちの資源の有限性へ十分な配慮が必要となるため、取り組み対象施策を厳選して効果的に選択できる能力が私たちに求められます。

環境未来都市創りを計画していくために、上述してきた全体論的思考、目的論的思考、プライオリティ思考、バックキャスト思考、システム思考などを存分に活用します。

さらに、実際の取り組みにあたっては現実にある厳しい資源制約を見極めつつ、数多く提示される施策の中から劣後順位の高いものを省き、目的達成のために優れた手段、手法を活用しながら、優先される諸施策に相互の関連性を考慮しつつ取り組むこととなります。

「戦略」とは「戦い」を「略す（省く）」ことを意味して、不要また有効性に乏しい戦い（取り組み施策）を省き、目的達成のために最も効果的な施策を効率的に実行に移すことを私たちは心がけます。

4. 「環境リスクマネジメント」の概念を活用した環境未来都市創り

環境問題が人類社会全体の問題として世界の政治の舞台に登場するきっかけとなったのは、レーチェル・カーソンが著書「沈黙の春」を通じて訴えた化学物質の問題でした。私たちのまわりには、もともと自然界になかった10万種類をはるかに超えて人間のつ

くり出した化学物質が流通しており、これらの多くに発がん性、変異毒性、生殖毒性などの健康被害に係る有害性評価が必要とされています。

このような化学物質問題に加え、日常生活に身近なゴミ（廃棄物）、資源の枯渇、生物多様性崩壊から地球温暖化など、私たちの生活に直接、間接に影響を及ぼすさまざまな問題を抱えています。

多発する異常気象現象から、多くの人々が肌で感じはじめた地球温暖化問題の深刻さを代表とし、環境問題が私たちの生存を脅かす環境事故を発生させる恐れが強まっています。

国連の関連活動組織、「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」は、地球温暖化が将来もたらす暴風雨、洪水、高波など異常気象による被害の増加、水や食料の不足に警鐘を鳴らすほか、生態系の破壊により、人類はこれまでのように自然の恩恵を享受できなくなることへの重大な懸念を示しています。こうした環境問題は経済や社会の分野の活動の制約となり、さらに経済の悪化が元を生じる貧困を背景とする国内外の紛争の増加や難民の発生などは深刻な脅威となるでしょう。

私たちの将来に発生が見込まれる上掲のような環境事故には「リスク」の概念で対応することがとても重要になります。

「リスク（risk）」とは、私たちが「将来発生する事故により被る損失の可能性」と云う概念です。「環境リスク」は環境分野において私たちの抱えるリスクと云うことです。

一般社会において言葉として直接耳にする機会は少ないものの、環境事故に対応するために「環境リスクマネジメント（environmental risk management：環境リスクへの対応管理）」の必要性が世界中で急速に叫ばれるようになりました。

工業製品等の国際標準規格づくりを担うISO（International Organization for Standardization：国際標準化機構）は、国連の環境活動の意向を受け、企業や自治体など組織の環境活動を支援するため、環境マネジメントシステムの国際規格としてISO 14001を1996年に発行しました。ISOは、その後、リスクマネジメントに係る国際規格ISO 31000を2009年に発行しました。

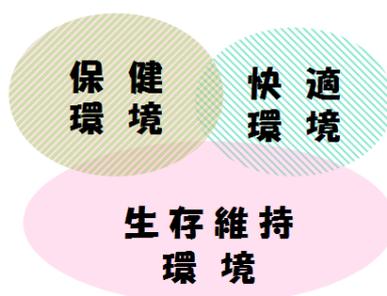
そして、ISOは組織の環境活動のなかで環境リスクへの取り組みを充実させるため、環境マネジメントシステム規格の改定を2015年に行いました。環境マネジメントシステム規格にリスクマネジメント規格の考え方を取り入れることが改定の大きな狙いの

一つでした。

このような動きを背景に、地域社会に所属して事業を営む組織でも、社会と一体化した環境リスクマネジメントに取り組む気運が広がってきました。

私たちが今日抱える環境問題の解決を考えるうえで「保健環境」、「快適環境」、「生存維持環境」の3つの側面をもって分類することが有効と提案してきました。保健環境は、私たちに健康被害を及ぼす化学物質や放射能汚染物質、電磁波など、私たちへの健康被害を発生させる分野です。快適環境は、緑地の喪失など身の回りの自然破壊、騒音、振動など、私たちの快適な暮らしを脅かす分野です。

図 環境問題への取り組みを考えるうえでの環境分野



保健環境、快適環境の分野で真剣な取り組みが求められていることはいうまでもありません。それに加え、将来に発生する環境事故が私たちの生存を脅かすという観点から、生存維持環境の分野での取り組みの重要性が急速にクローズアップされてきました。

私たちは、次の第4節で持続可能な地域社会創りを進めていくために、私たちの地域行政に住民参加の環境監査の導入を提案しています。環境の時代に柏の地域社会の持続性をしっかり確保していくため、地域の環境経営に市民社会が積極的に関与し、責任を果たさなければならないと考えるからです。

この提案には、「地域社会の経営に環境マネジメントシステムの考え方を取り入れる」内容を含んでいます。私たちが目指す地域社会像、環境未来都市かしの姿を描き、実現に向けた計画を策定し、事業年度ごとの活動を通じて着実に目標達成を図ると云うものです。

環境マネジメントシステムの考え方の柱である、いわゆる「P D C Aサイクル」としてプラン（Plan；計画）、ドゥー（Do；実施）、チェック（Check；点検）、アクション（Action；見直し）を事業年度ごとに実施し、ゴールに向けて活動内容をス

パイラルアップ(spiral up：継続的なレベル向上)を図ります。

図 市政における環境経営のスパイラルアップ



図:PDCA サイクル

エコアクション21ガイドライン 2009年版 8ページより抜粋

私たちの目指す環境未来都市づくりは、環境、経済、社会の諸要素への対応、都市計画を含む文字通り社会全体のあり方を探求することになります。なかでも、環境リスクへの対応については、ISOの国際規格の考え方に学びながら、環境リスクマネジメントの概念を中心的な考え方として取り入れていきます。

第4節 「住民参加の環境監査」をもって巡らせる環境未来都市かしわ創りへの想い

本報告書は、この後の第Ⅱ章で私たち市民環境研究会の過去すべての活動を振り返ります。私たちは、「環境問題に対応するため、なぜ持続可能な地域社会創りを進める必要があるのか」について理論の体系化を図りました。そして、それをもとに「目指す環境未来都市かしわ像」と「実現に向けた道筋」についてグランドデザインを試みてきました。

2013年度の私たちの活動においては、環境未来都市かしわ創りの実現のための論理のステップアップを議論しました。そして、この2014年度および本2015年度には「持続可能な地域社会創り」の論理体系を再確認したうえで、環境未来都市創りの実現に向けて住民参加の活動に係る論理をさらに発展させました。

1. 「環境デモクラシー」の考え方を基盤に進める環境未来都市創り

今や私たちは膨大な量の知識が渦巻く社会に生きており、このような知識を適格にコントロールすることは至難の技となりました。しかし、私たちを取り組む環境問題、持続可能な地域社会創りは、こうした膨大な量の知識をつなぎながら、可能な限り実効性のある実践行動に結びつけていくことが鍵となります。

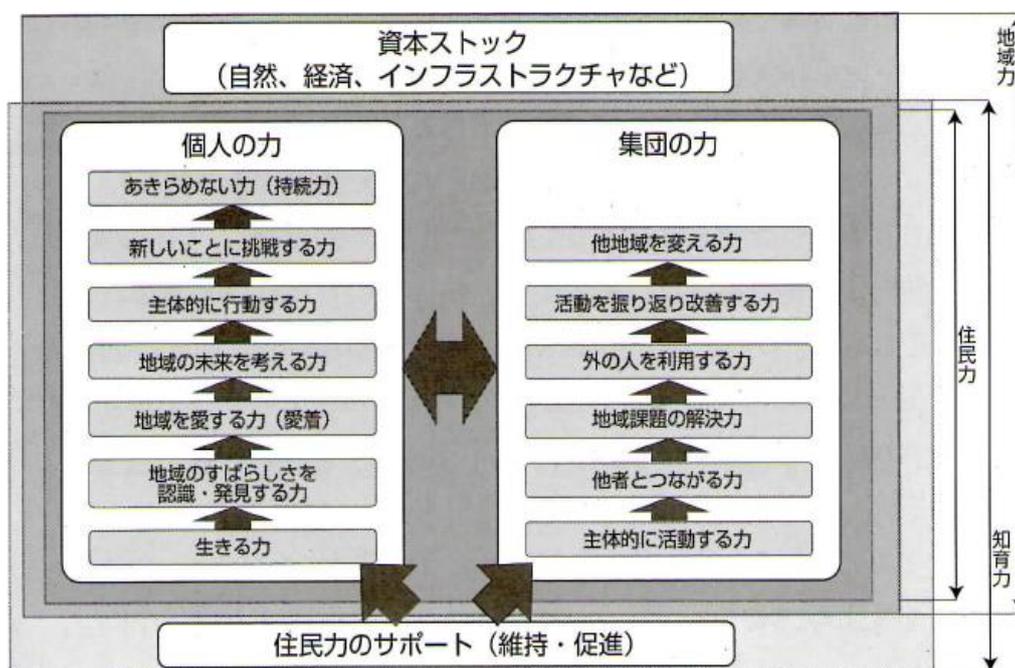
そして、私たちはこのために「市民の主体的な参加が欠かせない」と訴えてきました。地域社会の統治と経営という課題に対応するには、これまでのように為政者、行政、学術

者や専門家に任せるのみでは、私たちが望む地域社会の実現は不可能であると考えます。環境未来都市創りは、多くの人々が責任ある姿勢をもってそれぞれの背景で培った「英知」をもち寄り進めることが不可欠と考えています。

多摩大学大学院の田坂広志教授たちの進める「デモクラシー2.0」の活動は、社会の統治と経営への関与として、市民が単に政治家を選ぶための選挙に参加するに止まらないで、主体的に経済社会政策の作成、実施に関与していく参加型民主主義の必要性を説いています。為政者、行政、学者や専門家まかせの「観客型の民主主義」から、市民一人ひとりが参加し、責任をもって取り組む「参加型民主主義」への転換が今こそ必要としています。

約50の基礎自治体が集まり組織する「環境自治体会議」では、地域の市民が参加し自治体組織に対し実施する環境マネジメントシステム監査（以下「市民監査」と表記）制度、「LAS-E」を運営しています。この環境自治体のLAS-Eは「ラスイー」と呼び、それぞれの地域で市民が主体的に参加する地域社会の経営を目指し、「住民自治」を柱にして運営されています。

図 地域の力を支える「住民力」



環境自治体白書2014-2015年版2ページより抜粋

環境自治体会議が発行した「環境自治体白書2014-2015年版」は、住民自治推進のために、地域の人々の「住民力」を高めることの重要性を指摘しています。上掲の図に示しましたが、この住民力と云う概念に関連して、社会の最大最適を実現するため

に「地域力」を高めなければならないと説いています。地域の力を高める基盤となるのが住民の力です。住民力を高めるためには、持続可能な地域社会創りに係る知識を地域の人々のなかに育む「知育力」も高めていく必要があります。

持続可能な地域社会創りに寄与する住民力については、「個人の力」と「集団の力」の2つのカテゴリーに分けて考えています。個人の力については、住民の一人ひとりの生きる力をベースに地域を愛する力を育みつつ、地域のために貢献し続ける個人の生き方が求められます。集団の力には、主体的に活動する力を備えつつ地域内外の他者ともつながり、地域において‘こと’を成せる力、地域の問題解決に活かせる力を求めています。

私たちの市民環境研究会は、市民の「自主」、「自立」、「自律」の精神に基づいて私たち市民自らが、「将来世代のための希望溢れる未来を柏に拓きたい」との願いで、2006年から活動してきました。これは、上述した環境自治体会議の唱える参加型の民主主義、住民自治をベースとして取り組みを進めるという主張と重なるものであり、「環境デモクラシー（環境民主主義）」と呼ばれる考え方の実践を目指すものです。

私たちは、環境デモクラシーを私たちの柏に醸成しながら、環境問題への対応、環境未来都市創りの基盤となる「環境思想」、「サステナビリティ思想」を市民社会のなかに育んでいきたいと思っています。そのため、私たちは「柏の市政に市民監査を導入してゆく」ことが有力な手段、前進のための大きなステップになると考えました。

2. 市民参加の環境監査は市民の「志」・「責任」・「英知」を育むプラットフォーム

私たちは、地域社会の変革に向けて住民力を育み地域力を高めるために、「市民参加の環境監査を柏市政に導入する」ことがとても大きな意味を持つと考えています。

市民が参加し運営する環境監査と聞けば、監査実施の技法や関連知識の乏しさを危惧する人が多いと思いますが、可能な監査方法を用いてまず作業に着手すべきです。地域の未来に強い想いを抱く市民が、責任ある姿勢で環境監査に参加していくことこそがまずは最も重要です。この作業を通じ、環境問題への対応、持続可能な地域社会創りに向けた諸施策を、市政の現場に触れながら皆で考えることが今必要な「変革」をもたらしていくのです。

市民監査に参加すれば、環境問題を改めて自己の問題としてとらえ直すことになるでしょう。持続可能な地域社会創りの施策への理解も深まります。市政の現場で市職員との協働の機会を通じ、職員の苦労などへの理解も膨らみます。誰もが施策の実行に手ごたえを感じるようになるはずです。

今日の環境問題は、環境事故として私たちにダメージを与えるのみならず、地域における経済活動を制約するため、その結果、税収を圧迫することにもなります。すでに大きな負債を抱える市財政をさらに悪化させかねません。そして、財政の悪化は医療、介護など私たちの社会福祉制度の持続性を危うくすることにも繋がっていきます。

市民監査を通じて、市民は柏市が抱える地域社会経営の困難な状況をつぶさに見ることになります。問題に対する理解が深まり、地域社会に対する市民の責任感が育まれます。

市民監査の場には、それぞれの生活や経済社会活動の場で培った「知恵」を備え志を同じくする市民が監査員として参加します。このような人々の経験、知識、知恵、感性が、実施すべき環境監査や市政のあり方について有益な議論を展開させてくれるはずです。

市民監査員は、市職員との協議の場を多く持つこととなります。監査作業を通じ、地域社会のあり方についても学ぶことになり、地域社会の将来について考えを膨らませていくでしょう。監査関連の知識や監査実施のための技法については、監査準備の段階から実践を通じて学びます。

本報告書の冒頭で、国連ハイレベル・パネルが警鐘を鳴らす環境問題の深刻な状況を紹介しました。食料、水、エネルギーなど私たちが生きていくために不可欠な基礎物質の確保すら、近未来にも危ぶまれるのが今日の状況です。人々が暮らす身近な場、私たちが暮らす地域社会からこそ対応を急がねばなりません。

このような想いを共有する市民による環境監査は、後世の世代の夢と希望を膨らませる「環境未来都市の実現」を真に可能にさせる「志」、「責任」、「英知」を育むプラットフォームになると私たちは確信しています。

3. LAS-E制度に学ぶ市民参加の環境監査の実務

「環境未来都市かしわ」の実現には、市民それぞれの夢と希望を叶えるという強い『想い』、実現に責任を持つとする『覚悟』が決定的な意味をもちます。幅広い分野で活躍する「想い（夢・希望・志）と覚悟（責任）」を持つ人々が集まり、『英知』を出し合って、「環境未来都市かしわ」を実現させなければなりません。

「環境未来都市かしわ」を実現させるため、私たちは、環境自治体会議が先進的、先駆的に進めてきた環境マネジメントシステムの監査、それを具体化するLAS-E（環境自治体スタンダード=Local Authority's Standard in Environment）の制度に注目しました。

L A S - E は、地域社会に環境デモクラシーを確立していくうえで示唆に富んでいます。私たちは地方自治体が実施する L A S - E 監査の現場に赴き調査することを含め、環境自治体会議の附属機関、N P O 法人環境自治体会議環境政策研究所の実施する講習会などにも参加しながら関連知識の習得に努めました。

市民参加の環境監査では、市行政の業務現場の一つひとつを、一般市民を含む監査チームを複数作って監査します。私たちが見せていただいた監査現場では、3名の市民と2名の課長クラス市職員の計5名で監査チームを構成することを基本としていました。そして、幾つかのチームには外部から市民監査の専門家も加わり監査が実施されていました。

監査の対象とする市政の業務現場は、事業課レベルを一つの単位とし、すべての事業所を対象に監査することを基本とします。その場合、監査は膨大な数の事業所を対象とすることになり、監査チーム編成の実情や監査の重点テーマなどを考慮し、複数年にわたり一定のローテーションで監査対象の事業所を絞りながら実施していくこともあります。

多くの事業所を対象に、適切な市民監査を効率的に進めていくためには、監査チェックシートを予め作成しておきます。L A S - E の監査では、一事業所に10程度の項目で監査チェックシートを作成しています。この記載チェック項目に従って、事業現場で職員に質問し、活動関連記録を確認します。また職場のゴミ分別などの状況を目視する、職員の環境行動の再現を求めるなどの監査を行います。

監査をより有効にするため、市民は監査の準備段階でチェックシート作成に参加し、その内容について議論を深めます。このような機会が、環境未来都市の実現に向けた市民の「志、責任、英知」を育むことに寄与することになるでしょう。

市民監査の結果を集計して内容の評価を行います。監査の評価結果は、市政における環境マネジメントシステムの最高責任者である市長に監査チームから報告され、結果をもとに次年度の環境活動に向けた提言がなされます。提言は、市の環境経営が抱える問題点を具体的に指摘し、次年度の改善を促します。

監査業務を通じて、市政は年度ごとに環境活動のレベルを継続して向上させることとなり、環境問題の克服、持続可能な地域社会創りに向けてスパイラルアップ（継続したレベルの向上）が実現されます。

第Ⅱ章 テーマ「環境未来都市かしわ創り」の市民研究活動を顧みる

一 過去の活動に当地の持続可能な地域社会創りに向けた論理体系を探る 一

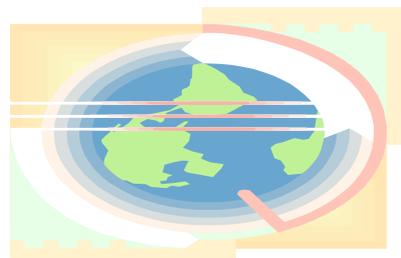
本第Ⅱ章において、私たち市民環境研究会の過去すべての活動を振り返りました。当地柏の持続可能な地域社会創りを掲げて、私たちは月例のワークショップ活動を軸にしながらインターネットを通じたウェブ環境勉強会、環境セミナー・勉強会の開催、環境活動現場の視察・調査、外部のシンポジウム・講習会への参加などといった活動を通じて、関連する論理の発展を図ってきました。

本第Ⅱ章では、こうした活動を通じて私たちが外部に向け私たちの主張する論理を紹介すべくまとめた報告書の8件を取り上げて、その概要を記しました。「#0」の2006年度末に開催したシンポジウムの他、「#1」から「#7」により2006年度から2013年度に至る間の年次活動報告書について内容の概略を紹介しました。

私たちの年次報告書の作成については、私たちの年間の活動履歴を簡単に紹介しつつ、主張する当地柏における持続可能な地域社会創りの取り組みを進めるための論理を紹介することへ、その主たる意義を求めてきました。こうしたなかで、毎年発行することを目指してきた私たちの報告書ですが、論理の発展過程の踊り場に至った2012年度については公に示す意味ある論理を組み立てるまでに至らなかったため、やむを得ず報告書の作成を見送りました。

これらの報告書のすべてについて振り返り紹介する本第Ⅱ章は、各項冒頭に報告書の目次を掲げそれぞれの報告書についての全体内容を一覽的に捉えていただけるようにしました。そして、この目次欄に続く下段に報告書の内容を概括したうえ、「(A) 報告書の構成を見る」、「(B) 報告書の主張を顧みる」の2つの欄を設けて、各報告書に記した内容の構成とその報告書において私たちが主張してきた論理の概要を記しました。

こうして、私たち市民環境研究会が目指す持続可能な地域社会創りに向けて基盤となる論理、当地柏において適用したい固有の論理、ゴールを目指す「環境未来都市かしわ」像、取り組みに踏み出すための論理など、私たちがこれまで発展させてきた当地における環境未来都市創りの論理の構築過程の背景を本章で紹介しました。前第Ⅰ章において体系化して示した包括的な論理への理解を深めていただける助けになると考えたからです。



希望あふれる『環境未来都市かしわ』への道すじ

— 「環境の時代」に私たちの‘夢’を託す地域社会創りを探るシンポジウム記録 —

《 目 次 》

ごあいさつ	3
はじめに	4
シンポジウム開会挨拶	7
第一部 基調講演	11
講師とシンポジウム参加者の意見交流	20
第二部 パネルディスカッション	25
パネリストの「環境のまちづくり」に寄せる想い	25
パネルディスカッション i : 日本を取り巻く環境の現状と課題	28
パネルディスカッション ii : 日本の未来像	36
パネルディスカッション iii : 2030 年に目指したい柏の未来像	44
パネリストとシンポジウム参加者の意見交流	53
<シンポジウム資料>シンポジウムレジュメ	59
<シンポジウム資料>基調講演レジュメ	60
<シンポジウム資料>レジ袋に関する意識調査アンケート	61
<シンポジウム資料>来場者アンケート	62
<シンポジウム資料>シンポジウム案内チラシ	63

図 環境シンポジウム

かしわ環境ステーション主催

シンポジウム「柏の未来をスケッチしよう！」

～ 私たちの暮らし・環境・社会を考える ～



私たちの市民環境研究会は、極めて厳しい環境の時代を迎えるにあたって私たち市民自らの手で将来世代のために当地柏の希望溢れる未来を拓きたいと考え、市民環境研究会を2006年6月に発足しました。

柏市の支援の下に活動する市民環境活動組織「かしわ環境ステーション」の「研究部会」に所属して、「環境未来都市かしわランドデザイン研究分科会」という長い名前をもって活動をスタートさせました。当地における持続可能な地域社会創り(以下、私たちの愛称「環境のまちづくり」とも表記)を目指して、地域の包括的な将来像を「環境未来都市かしわ」と呼称しながら、私たち自らの手で描いてみたいとする大望を活動グループ名に込めました。

このような私たちの市民環境研究会の初年度の活動において大枠の考え方のまとめを行ったうえ、この年度末に広く当地柏の市民社会からも意見を得てみたいとして、環境シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、環境の時代を迎えて私たちの地域社会が目指すべき未来像を考えると云うとても広がりや深みのあるテーマを掲げたため、開催にあたってはこの分野に関連して広く活躍されている3名の有識者を外部からお招きしながらの開催としました。

(A) 報告書内容の構成を見る

本報告書の構成は、報告書冒頭に「ごあいさつ」欄を設けて私たちの市民環境研究会を紹介しながら、今回のシンポジウム結果を報告書に作成したいと考えた経緯を記したうえ、続く「はじめに」の欄でシンポジウム開催の趣旨と内容、および以下の報告書本文の概要について記しました。

報告書本文の内容については、実際のシンポジウムの進行を録音したものをテープから起こして、シンポジウムの発言者の言葉をそのまま記録にして表示することにしました。シンポジウムの最初に、当時の麗澤大学の副学長でもあったかしわ環境ステーション小野会長から環境シンポジウム開催の趣旨や意義を紹介しつつ「シンポジウム開催挨拶」を行っていただきました。

つづいて、実際に進んだシンポジウム内容の記録を「第一部 基調講演」と「第2部 パネルディスカッション」の2つに区分して、報告書としてまとめました。

第一部の基調講演は、NPO法人GRI日本フォーラム会長の木内孝さんを講師として、環境の時代に目指したい当地柏の未来についてお話をいただきました。この基調講演の最後には講師と一般参加者との意見交換の機会を設けました。

第二部では、外部有識者、柏市職員、柏市民をまじえたパネリストによるパネルディスカッションを実施しました。パネルディスカッションは、内容を「i. 日本を取り巻く環境の現状と課題」、「ii. 日本の未来像」、「iii. 2030年に目指したい柏の未来像」の3つのテーマを掲げて、当地柏の持続可能な地域社会創りに向けて多くのアイデア、取り組

みを進めるうえで役立つヒントを提供いただきました。

このパネルディスカッションの最後においても、パネリストの皆さんと一般参加者との間で意見交換の時間を設けて、議論を深めることができました。そして、ここでの一般参加者からは、私たち研究会メンバーの環境のまちづくりへの想いに勝るとも劣らない熱い、そして哲学的ともいえる深い思想を感じさせる意見を多くいただきました。

このように本報告書は、実際のシンポジウムの復元内容を中心にまとめることにより、当時の臨場感を伴ったシンポジウムの進行状況を本報告書の読者の皆さんに感じていただきたいと考えました。さらに、報告書巻末には当時のイメージを膨らませていただけるように、レジメなど実施したシンポジウム関連の資料を掲示して報告書の構成としました。

(B) 報告書の主張を顧みる

私たちは地域の市民環境研究会として、当地の持続可能な地域社会創りと云う究極的な大きさをもつテーマにチャレンジする難しさを抱えて出発しました。しかし、このシンポジウムを通じて講演の講師、パネリストの有識者の方々からのみならず、参加いただいた一般市民の皆さんから私たちの研究へ示唆に富んだ多様な意見を得る貴重な機会となりました。さらにまた、私たちが環境問題への対応を持続可能な地域社会創りを通じて取り組むとする主張の方向性の正しいことを確認する機会ともすることができました。

シンポジウムは、私たちが「これまで流」の生き方を続ける限り、この10年、20年と云った近未来にも社会の持続性の崩壊に突き進む流れを止められない状態（「ポイント・オブ・ノーリターン」）に至り得るとの危機感を前提とした論議が進みました。このような危機を回避するためには社会の変革が不可欠とし、変革を通じて描く希望ある未来の地域社会はどうあるべきか、について多様な意見が提示されました。一般参加者からも、環境問題からの制約により経済活動が停滞するなか、社会保障制度を支える財政の持続性崩壊への危機感が示されるなど、「これまで流（私たちのこれまでの生き方、あり方）」からの脱却、社会の変革の必要性を訴える意見が多く出されて、私たち市民環境研究会の以降の活動に大いに参考にすることができるものとなりました。

そして、社会の変革を通じて過去の歴史の前例にない、全く新たな地域社会をデザイン（設計）していくためには、「バックキャストिंग」と云う思考形態が鍵になるとする考え方の提案を受けました。限りなく広がる要素を抱え変化する地域社会のあり方を考えるうえでは、私たちの既存の知識を積み上げる思考の形態、「フォーキャストिंग」の考え方のみで求めたい社会像を描くことは困難として、まずは生活世界で健全に育まれた感性が主導しつつ理想の社会像を描くことが未来を拓く鍵となる意味をもつと教えられました。

こうして環境、経済、社会の要素に幅広く想いを巡らせながら持続可能な地域社会創りについて論議した今回のシンポジウムは、今日に私たちの抱える極めて厳しい環境問題を

克服したうえ、将来に向けて希望ある地域社会をどのように描くことができるのかと云う命題を念頭に展開されるものとなり、当初の期待を裏切らない意義の深い成果を得ながら終えることができました。

《環境シンポジウムのポスター》

シンポジウム

柏の未来をスケッチしよう！
～ 私たちの暮らし・環境・社会を考える ～

日時：2007年3月10日(土)
 午後2時から5時(開場：午後1時半)
 会場：慶応大学 生涯教育プラザ1階 プラザホール
 (向かい側までのご案内はご遠慮ください。)



JR常磐線(高崎線) 柏駅西口1番乗降口から徒歩15分以上歩み、「新高松駅前」で下車。高さ160cm、バス停のすぐ後ろの建物です。

参加費：無料
 主催：かしわ環境ステーション

申込方法：
 「3月10日シンポジウム参加希望」と明記し、氏名と電話番号をご記入のうえ、メール、ファックスで「かしわ環境ステーション事務局」にお申し込みください。(先着100名様まで。) お電話でもお申し込み頂けます。お申し込みいただいた個人情報は本事業に関する利便目的の範囲内でのみ利用します。

メールアドレス： info@kankyostation.org
 ファックス番号： 04-7172-2100

子供が子育てでは、子供たちが未来を楽しめることが大切です。2020年までに、子供たちが喜び子育てできるような自然を取り戻しませんか？人と自然、暮らしと環境が調和した都市の未来の姿も一緒に考えましょう。

本講演会 (14:15 - 15:00)
 木内 孝 氏
 NPO法人GEM日本フォーラム会長

パネルディスカッション
 (15:15 - 16:45)
 パネリスト
 長瀬敏彦 氏
 NPO法人社会的責任投資フォーラム代表理事

岡田敦子 氏
 株式会社クレアン代表取締役社長

高橋光一 氏
 かしわ環境ステーション会員

石本直樹一 氏
 柏市役所環境部グリーン推進課企画室長

コーディネータ
 大橋孝夫 氏
 慶応大学外国語学部教授

「かしわ環境ステーション」は、環境の学習や研究の場として、また、環境保全活動を行う市民や団体の交流の場として利用されている。柏市の環境学習拠点施設です。電話番号：04-7170-7090 (電話受付時間は、火曜日から日曜日の午後12時～17時まで。)

地域社会のあり方に関心のある方なら、どなたでもご参加いただけます。

1. 2006 年度活動報告書

「環境未来都市かしわランドデザイン」研究分科会報告書

《目次》

はじめに	3
序章 (プロローグ)	5
第1章 環境に係る柏市の現状	9

第1節 柏市の概要	9
第2節 柏市の地域特性と概況	10
第3節 地域環境の現状	14
2章 環境に係る柏市の課題	23
第1節 自然環境の課題	23
第2節 生活環境の課題	23
第3節 快適環境の課題	25
第4節 地球環境の課題	25
第3章 環境に係る課題解決に向けて	28
第1節 「人」ライフスタイルの変革	28
第2節 「モノ」技術革新	31
第3節 「情報」環境情報の共有	31
第4節 「財政」補助金に頼らない資金準備	36
第4章 環境未来都市かしわ創りに向けた手法	40
第1節 各種手法の検討	40
第2節 取り組みのベストミックス	43
第5章 環境未来都市かしわの将来像を描く	45
第1節 ハード面から描く環境未来都市かしわ	45
第2節 ソフト面から描く環境未来都市かしわ	47
第6章 環境未来都市かしわ実現に向けたステップ	49
第1節 市民としての役割	49
第2節 事業者としての役割	49
第3節 行政としての役割	49
第4節 かしわ環境ステーションの役割	49
第5節 市民・事業者・行政・大学との連携に向けて	49
最終章 エピローグ	52

本報告書は私たちの市民環境研究会の初年度の活動について、前掲した年度末に行った環境シンポジウムからの学びを含めてまとめを行いながら、私たちが主張する持続可能な地域社会づくりの論理をご紹介します。

「21世紀は環境の世紀」とされる時代に生きる私たちは、多様に広がり反転の見通しのないままに深刻化する環境問題を抱えながらも、問題への対応は後追いの「対症療法」による取り組みが中心となってしまっている現状にあります。このため、本格的な解決に向けた予防的に取り組む「体質改善療法」、そして「根治療法」が希求されるものとなっています。

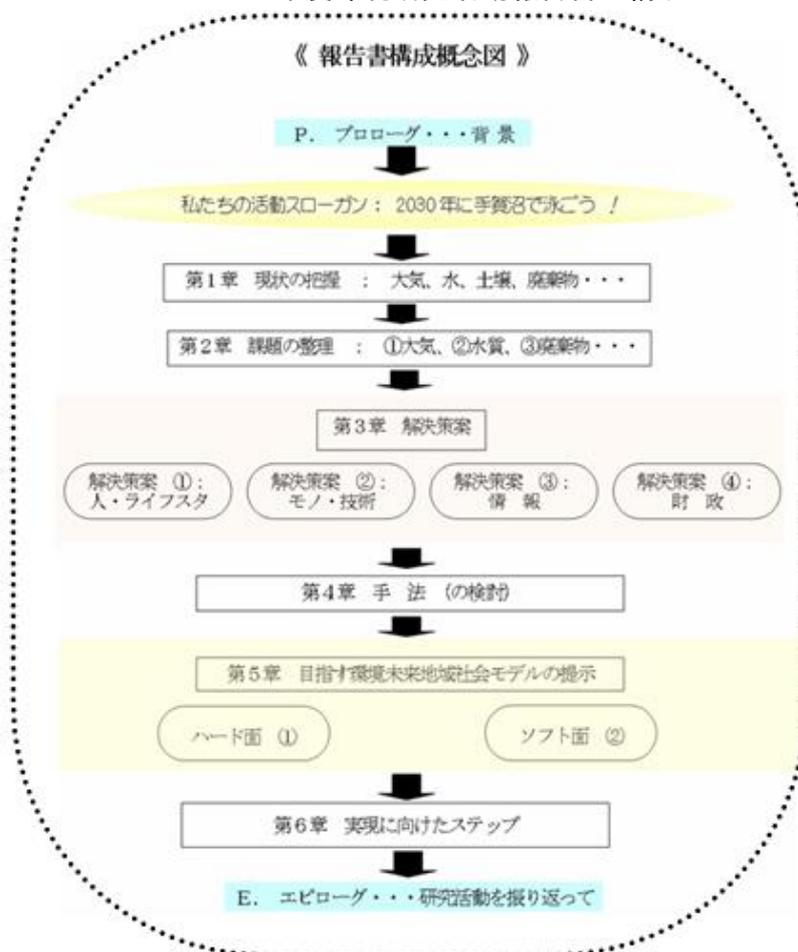
こうした環境問題への対応には、持続可能な地域社会創りと云う社会の変革（体質改善療法・根治療法）による取り組みが不可欠であるとの論理を掲げて、この環境のまちづくりのゴール（Goal：最終到着地）である当地柏の将来を私たちは「環境未来都市かしわ」と呼びながら、環境未来都市の実現を目指して市民環境研究を開始しました。このように限りのない広がりをもって極めて難しさのある、チャレンジング（Challenging；挑戦的）なテーマであることを理解しながらも今、取り組みに向けて誰かが先鞭をつけなければならぬ、まずは私たちから呼びかけを行ってみたいと考えて活動を開始しました。

このような私たちの初年度の研究活動は、当地柏の環境に関わる全般的な理解に始まり、取り組み課題から環境問題の克服を通じた持続可能な地域社会創り（環境未来都市かしわ創り）に向けた考え方までの広い要素を俯瞰的に眺めて整理する試みとなりました。

(A) 報告書内容の構成を見る

活動初年度の報告書としては、当地柏において環境問題を克服した持続可能な地域社会創りを目指すために必要と考える要素を網羅した、包括的な内容のものになりました。

《 2006年度環境研究活動報告書の構成 》



本報告書の冒頭「はじめに」においては、私たちが今日に抱える環境問題の深刻さへの認識を示しつつ、私たちの市民環境研究会を発足した背景と趣旨を説明しました。続いての「序章（プロローグ）」では、読者が以下の本文に入りやすいように概要を紹介したうえで、困難な状況を克服して将来世代のために希望溢れる環境のまちづくりを当地で進めたいとする決意を示しました。

本文は第1章から第6章までの6章立て構成として、環境の側面から見た当地柏の現状分析、抱える課題、こうした課題の解決策についての考察、環境未来都市創りのための手法、私たちが描くことを試みた当地の環境未来都市像、環境未来都市かしわ創りに向けた取り組みの内容について、この時点における私たちの考えを巡らせてみました。

そして、最後の「エピローグ」において、初年度において私たちにとり大きなイベントとなった年度末の環境シンポジウムを含め顧みつつ、私たちが行った活動全体について評価を試みしました。

(B) 報告書の主張を顧みる

私たちの市民環境研究活動は、繰り返し記してきたように、究極的な広がりと深さまた重要性を備えて現在社会が最大の課題に掲げて取り組む「持続可能な社会づくり」と云った壮大なテーマに対して、地域の小さな一市民環境会が挑戦する極めて野心的な試みです。この私たちの活動はまるで闇夜の大海原に光を求め繰り出す小船のような危うさを感じさせて、大きな不安のスタートとなりました。

このようなゴールへの筋書きのない難しいテーマへ挑戦する活動でしたが、地域社会の幅広いセクターに呼び掛け多くの方から協力を得て、その英知を集めることができました。こうして極めてハードルの高いテーマへの取り組みながら、初年度の活動は私たちのその後の活動の展開に一筋の光を与えるものとなりました。そして、この当年度の報告書をまとめる議論を通じても、私たちの主張する当地柏における環境のまちづくりの論理的基盤を確立したうえ、論理の枠組みを整理する機会にできました。

こうして、当地柏を環境の側面から俯瞰しつつ抱える問題に対する課題を浮き彫りにして、当地における環境問題への取り組みに係る基本認識の共有を図りながら、活動の進め方に考えを巡らせました。そのうえで、私たちがゴールとして目指す当地の環境未来都市づくりには、まずは私たち生活世界に生きるものとして、厳しい環境制約下であっても持続性のある豊さの追求を可能にさせる域社会像を描くことが、私たちにとり大変重要な活動になると云う考えを示しました。

生活世界に健全に育まれた感性が主導して、将来世代のために夢と希望を与えることのできる地域社会の全体像を描くこと、環境未来都市をグランドデザインできることが環境のまちづくりの極めて重要なポイントになるとして、この生活世界の感性を浮き彫りにしたうえ客観的に認識できる知識としてインテリジェンス化（知識の活用に向けた形式知化）することに、私たち市民環境研究会の大きな存在意義があるとの考えを示しました。

すなわち、環境のまちづくりを具体的な取り組みに結び付けていくためには、望む地域

面積約115 km²の柏市



の未来像を私たち市民自らの手をもって如何に優れて描くことができるかが成功の鍵になると強調しました。また、この重要とする作業は「生活世界に健全に育った感性」がリードしながら関連する知識を集約しつつ理想の環境未来像を描くべきものとの結論を示しました。そして、この意味から生活世界における主役としての私たち市民の役割が大変重要になることを説きました。

2. 2007 年度活動報告書

私たちの地域循環型社会づくりへの挑戦

- 山本産業㈱「生ごみ」資源循環活用実証研究」と伴に考える地域循環型社会創り×への展望 -

《 目 次 》

ごあいさつ	3
はじめに(プロローグ)	4
第Ⅰ部 ‘生ごみ’資源循環活用実証研究(山本産業株式会社)	7
1. 実証研究の内容	7
2. 実証研究のねらい	9
3. 研究活動の成果および評価	10
4. 廃棄物事業者としての地域循環型社会創りに向けた想い	12
第Ⅱ部 地域循環型社会創りに向けポイントとして考えたい要素	14
1. 急がれる地域循環型社会創り	14
2. 地球規模の影響が避けられなくなった地域社会の「食料安全保障」	15
3. 改めて振り返る私たちの命を支える「食」	17
4. わが国の「食育基本法」に観る「食」を保障する地域社会のあり方	19
第Ⅲ部 提案「環境未来都市かしわ」創りへの展開	23
1. 「環境の時代」を迎えて考えたい私たちの暮らし方・地域社会のあり方	23
2. 地域循環型社会創りが支える「てがぬま遊トピア」構想の展開	25
おわりに(エピローグ)	30

活動2年目となる2007年度の報告書では、「環境の時代に希望あふれる地域社会の探求、将来世代へ夢を育む環境のまちづくり」を訴え発足した私たちの市民環境研究活動を改めて振り返ったうえ、どのように私たちの活動を発展させるべきかについて考えを巡らせながら取り組んだ1年間の活動の成果をまとめました。

図 地域循環型社会創りを支える基本の概念



今日に私たちの抱える環境問題を克服して新たに持続可能な地域社会創りを進めるためには、地球の物理的な限界までを睨んで進める地域循環型社会創りが取り組みにおける大きな柱の一つであると、私たちは考えています。私たちの研究会に当地で廃棄物処理事業を営む山本産業株式会社の方に参加いただいて、同社において柏市、小学校、地域農家、大学、市民活動団体との協働で進める、学校給食からの廃棄物の循環活用について実施した実践実証的な研究活動を報告いただきました。

また、本年度はこの学校給食からの廃棄物の循環型活用の実践実証的な研究に関連して、地域住民としての私たちのQOL（Quality of Life：生活の質）を考えるうえで柱の一つとする大きなテーマ「食の安全保障」についても、環境のまちづくりのなかで如何に対応すべきかに考えを巡らせました。そして、こうした地域循環型社会創りや食の安全保障と云う論理を膨らませつつ、前年度の報告書に当地で取り組みたいと提案した「てがぬま遊トピア」構想の施策案を発展させて、環境のまちづくりの論理全体の発展を試みました。

(A) 報告書内容の構成を見る

今回は、前年度の活動内容を踏まえつつ持続可能な地域社会づくりの論理の発展を試みる1年間の市民環境研究の活動報告となりました。最初の「ごあいさつ」において、環境問題における環境資源の有効活用を通じて食料安全保障を考えることの大切さへの呼びかけを行い、続く「はじめに」においてこうした資源の有効活用を最大化する循環型社会創りの重要性を説いて、後に続く本文の理解を助けるための導入文としました。

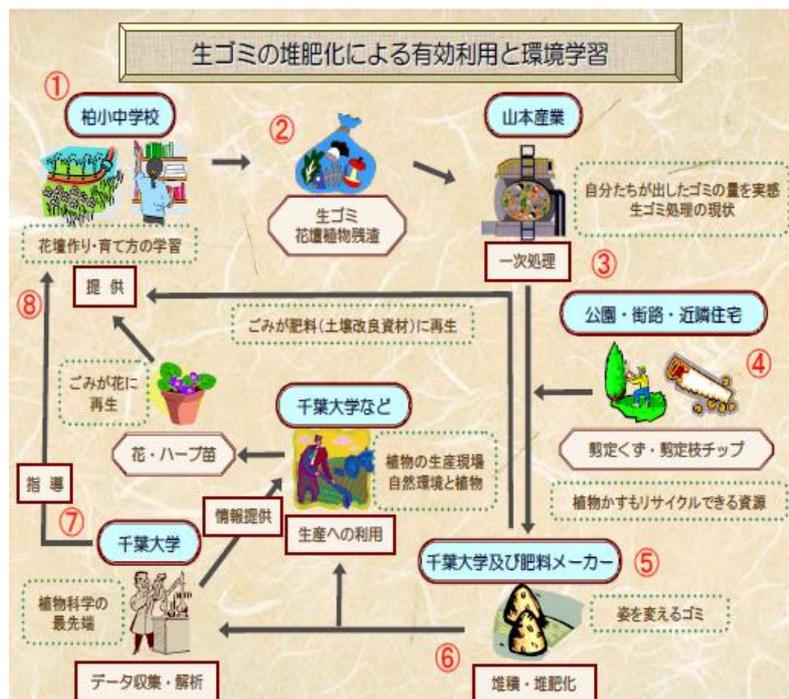
本文は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3つで構成し、第Ⅰ部において山本産業株式会社による生ごみを循環資源として活用する実証実験の研究内容を報告しました。学校給食から出た生ごみを有機肥料に生成し畑の野菜作りや花壇の花弁の栽培に使用して、資源を最大限に活用する社会の仕組みづくりを進めるための実証実験の内容を紹介しました。

第Ⅱ部では、このように廃棄物となった食品についても循環資源として食料になる野菜の育成にできるだけ活用することが私たちの食の安全保障に寄与することを説いたうえで、環境の時代には食の地産地消を考えていくことの大切さを説明しました。

そして第Ⅲ部では、当地の地域循環型社会創りを進めるなかで具体的な取り組み例として「てがぬま遊トピア」構想を用いて、実際に進めるうえでのモデルとなる考え方を示しました。厳しい環境の時代には収入の低い高齢者などの社会的に弱い立場に陥る人たちが急増することも懸念されて、こうした人達を優先対象とする協働集団居住エリアを、当地の豊かな自然の特性を生かしつつ創っていくと云う考え方を示しました。環境資源を最大限に生かす考え方をもって食料、エネルギーの地産地消を進める取り組みを通じて、このなかで居住者がその一生を命いっぱい燃やしつつ創出すると云う、究極の社会保障のあり方を探求するサステナビリティ施策のモデル概念を示してみました。

最後の「おわりに」において、上記本文で示した趣旨を総括しながら、私たちがこれまでの施策に見られがちな「部分最適」の思考に偏りがちであったことを反省し、時空を超えた（空間と時間とを跨いだ）「全体最適」の考えをもって環境未来都市を拓いていきたい、と云う想いを示しました。

図 地域の廃棄物処理事業者が展開する循環型社会創りに向けた実践実証研究



(B) 報告書の主張を顧みる

今日に私たちが抱える環境問題では、過去の公害時代において有害化学物質が引き起こす深刻な健康被害などの環境事故を経験してきました。そして、今日ではこのような過去や現下に発生しているものにも増して、将来に経済や社会の要素までも巻き込みつつ幅広い分野に生まれる深刻な環境事故による被害を私たちは避けられない状況が危惧されるようになりました。

こうした環境問題への対応を考えるなかでも、私たちは「食料安全保障」、「エネルギー安全保障」が重要な要素、特に優先して取り組むべきものと主張してきました。すなわち、私たちが抱える今日の環境問題は私たちの‘生’を支える基本となる食料、エネルギーと云った基礎物質の持続的な供給までを脅かすものです。このために、地域社会における経済社会システム（経済、社会の機能上の仕組み）創りとして、食料、エネルギーの将来に亘っての持続的な確保を図っていかなければならない、と強く主張しています。

一方、これまで流で生きる私たちの今日の社会は膨大な廃棄物を排出し続けることを止めることができずに、最終処分場が不足する状況を背景として不法投棄等の廃棄物の不適正処分など深刻な社会問題を生み出しています。こうした環境資源の大量消費をベースに大量廃棄を続ける私たちの今日の生き方を大きく転換したいとする目標を念頭に置いた、山本産業株式会社によるこの度の実証実験を通じた研究活動は、食品廃棄物を堆肥化しながら活用して新たに作物を生み出すと云う、地域における物質循環活用の仕組みづくりを目指す貴重な取り組みとなりました。

さらには、この食品廃棄物の物質循環活用の実験は、単に物的に良質な堆肥を生み出し野菜や花卉などを育てると云う活動に止まらず、こうした物質の循環活用が地域社会のなかで自然体に、また人々の心の豊かさを育みながら発展させていく社会的な実験の場として進められたことが特筆されるものとなりました。

私たちは、これまで環境問題への取り組みとして、自然科学また社会科学の特定分野でそれぞれが独立して個別に進む活動の限界および弊害について指摘してきました。そして、今日私たちが抱える環境問題への対応は、住民の全てが将来に亘り持続して豊さを追求できる地域社会の実現と云う究極的なゴールまでを見据えて、社会を構成する幅広い要素の関連性を捉えながら取り組まなければならないとの主張につなげてきました。

今回、紹介した生ごみをリサイクルし地域社会全体で有効な資源循環活用する社会的な仕組みを探求すると云う実証実験は今後、私たちが生きるうえで究極のゴールとして取り組む持続可能な地域社会創りに向けて、とても大きな役割を担ってくれるものとの期待が膨らみました。

報告書では、以上のような考え方を生かしてさらに具体的な環境のまちづくりの施策に活かしたいとする考えを巡らせました。今の私たちが毎日の「食」の大切さを忘れがちになるなかで、わが国の食育基本法は、「子供たちの健全な心と身体を育成し、豊かな人間性を育み、生きる力を身につけていくためには、何よりも『食』が重要である」として、「食育」の重要性を強調しています。こうしたなかで、地域社会の活性化、豊かな食文化の継承と発展、環境と調和のとれた食料の生産および消費の推進を、環境のまちづくりの推進を通じて進めることの重要性を説きました。

また、私たちの初年度の報告書で紹介した「てがぬま遊トピア」構想について、今回の実証実験を通じて関連づけて論理の発展を試みました。わが国にとって「環境の時代」への対応は「高齢化時代」における課題への対応と併行して取り組むことが求められます。高齢化した社会的弱者などの増加が懸念されるなか、このような人たちについても生きいきとその寿命を全うできる場を環境資源の有効利用、食料安全保障、エネルギー安全保障および社会保障を含む生活安全保障を確立する場として実現できる、と主張する私たちの考え方を示しました。

3. 2008 年度活動報告書

環境の時代に持続可能性を見据えた地域社会創りを考える

- わが国学術界の先進的・先駆的な活動に学ぶ本格的な環境問題への取組み -

《 目 次 》

はじめに	3
第Ⅰ部 生ごみが花になる「ドリーム・フラワー・プロジェクト」	5
1. 生ごみ資源循環活用実証研究の概要	5
2. 実証研究活動のねらい	6
3. 実証研究活動の展開	7
4. 実証研究活動の評価	9
5. 本年度の実証研究結果を踏まえた今後の課題	10
6. 廃棄物事業者としての地域循環型社会創りに向けた想い	10
第Ⅱ部 図書「サステナビリティ学への挑戦」に学ぶ環境のまちづくり A	12
1. 図書「サステナビリティ学への挑戦」との出会い	12
(1) 書との出会い	12
(2) 今、なぜ環境の時代に「サステナビリティ」なのか？	14
(3) わが国で「サステナビリティ学」創生への挑戦が始まった	15
2. 書の各章における主張を読む	16
(1) 書の第1章における主張を読む	17
(2) 書の第2章における主張を読む	19
(3) 書の第3章における主張を読む	22
(4) 書の第4章における主張を読む	26
第Ⅲ部 図書「サステナビリティ学への挑戦」に学ぶ環境のまちづくり B	30
1. 環境のまちづくりに向けた書の活用	30
(1) 書の主張に学ぶ環境のまちづくりの進め方	30
(2) 私たちの考える環境のまちづくりに向けた関連要素の構造化	30
(3) 「プラス・サム・ゲーム」の論理で考える環境問題への対応	32
(4) 「プラス・サム・ゲーム」の論理で確認する環境問題への対応の基本	34
(5) 「プラス・サム・ゲーム」の論理で主張する私たちの環境のまちづくり	35
2. 私たちが考える環境のまちづくりに向けた関連要素の構造化モデル	38
(★) 頂上概念に据える「理念」	39
(1) 第1階層概念に据える「柱とする考え方」	40
(2) 第2階層概念に据える「柱とする取組み目標」	41
(3) 第3階層概念に据える「実現のための施策」	42
おわりに	45
ご参考資料 図書「サステナビリティ学への挑戦」に学ぶ環境のまちづくり	

私たちの市民環境研究活動は、環境の時代にあるべき地域社会を探求すると云う究極的な大きさを備えたテーマに挑戦するものであるため当初、その展開に大きな不安を抱えてのスタートでした。しかし、この3年目の活動を紹介する本報告書では、環境の時代の荒波を乗り切って安住の地へと向う航海のための確かな海図を描き得るとして、一筋の光が見える私たちの活動を報告することができました。

この3年目の活動においても、当地で廃棄物処理・リサイクル事業を営む山本産業株式

会社に、柏市、小学校、大学、地域住民との協働事業として2年目の前年から始めた食物廃棄物のリサイクル循環活用の実証研究を継続していただきました。そして、生ごみが花になる「ドリーム・フラワー・プロジェクト」と命名しながら地域循環型社会創りについで論理の発展を試みる、実践実証的に進めた研究内容を報告しました。

◀ 循環型社会創りの活動における子供たちの環境学習風景 ▶



田中北小学校コンポストづくり



柏第八小学校祭



千葉大学の野菜栽培施設見学

これと併行して、わが国の学術界に新たに生まれた「サステナビリティ学連携研究機構（略称：IR3S）」の活動が主張する持続可能な（持続可能な）社会創りの論理についての理解を試みました。この学術界から発信された画期的な主張についての理解を進めることにより、私たちが持続可能な地域社会創りとして主張する論理の整理を行いました。そして、こうした当年度の研究活動を振り返りながら、持続可能な地域社会創りに係る私たちの論理のさらなる発展も試みました。

(A) 報告書内容の構成を見る

本報告書は、冒頭の「はじめに」において読者が続く本文に入りやすいようにその内容を概説しながら、私たちの主張する持続可能な地域社会創りの論理について地域社会において議論することを市民社会に呼びかけました。

そして、本文は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3つの構成で研究活動の内容を紹介しました。第Ⅰ部は、実際に地域社会に役立つ物質循環活用のあり方について、自然科学のみならず人文・社会科学を含めた全学的な視点から実践を通じて探求する、前年から継続した山本産業株式会社による実証研究活動について報告しました。

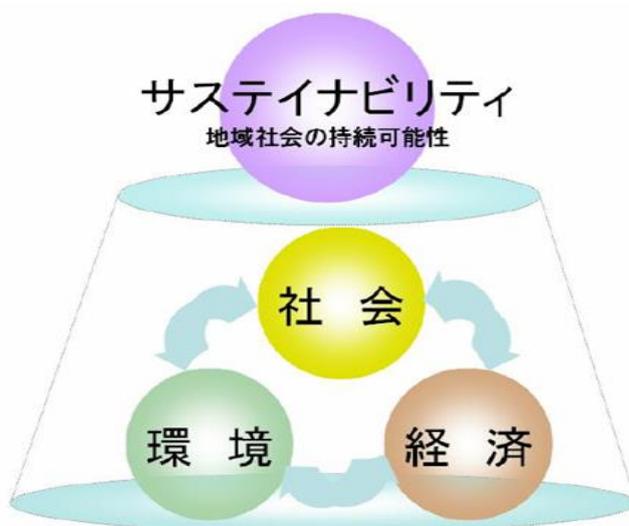
第Ⅱ部は、私たちの環境問題への対応における理論上の礎を築けるまでの期待もって、わが国の学術界がIR3Sの組織を設立して取り組む研究内容の理解を試みました。

IR3Sの活動は、社会全体としてのサステナビリティの実現は環境側面のみならず経済側面、社会側面から観る要素と一体化して達成を目指さなければならないとし、近代文明を通じこれまで捉われてきた既成概念を大転換する必要があるとの主張を展開しています。そして、この主張のうえに環境問題への対応、持続可能な社会創りを考えていくた

めの幅広い知識、見識を斬新に提示するものとなっています。

こうして第Ⅲ部では、第Ⅰ部と第Ⅱ部の内容を踏まえながら、私たちの主張する環境のまちづくりに向けた論理のさらなる発展を試みました。そして、当地市民社会に提示して広く意見を仰ぎながら、環境未来都市かしわの実現のための理論を地域ぐるみで弁証法的に発展させることを提案しました。

図 環境・経済・社会の3つの側面を一体化して実現する「持続可能な社会」



(B) 報告書の主張を顧みる

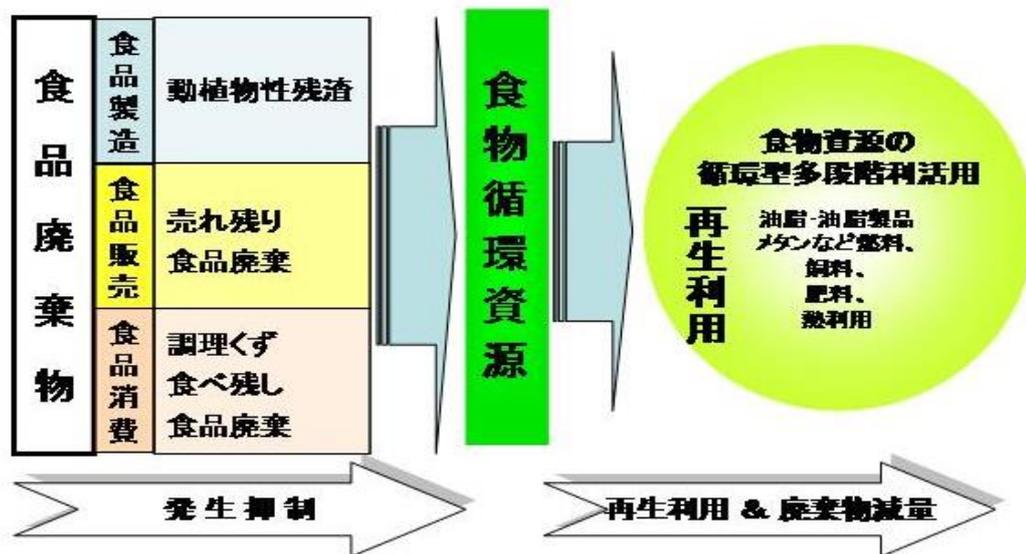
本年度の研究活動を通じて、私たちが今日抱える環境問題の問題としての規模、関連要素の広がり、もたらす結果の重大さなどを考えたとき、私たちの社会全体の変革、環境のまちづくりを通じて克服を目指す必要がある、としてきた論理の正しいことを確信することができました。

食料やエネルギー等の物資の確保に地球規模の環境制約を大きく受けるに至った現在、地域社会において必要となる「モノ」の将来に向けた安定確保を念頭に置きながら、物質循環活用の確固たるあり方を確立していくことは、環境のまちづくりの中心的な課題の一つです。

山本産業株式会社による生ごみのリサイクル循環活用の実証実験は、単に廃棄物処理のなかでリサイクルの技術的な進歩を目指すということに止まらず、大局的な視点から当地の持続可能な地域社会創りを睨んだ活動を目指すものとなりました。すなわち、私たちの‘生’を支える食料の持続性ある当地における供給、食における安心、安全の確保、食育の推進、さらに物質循環システムの構築と云った取り組みをベースとして、地産地消による地域の環境資源の節約さらには増強と云った極めて広い概念を包括しながら、地域社会

の食料安全保障の概念を追求するものとなりました。

図 食品廃棄物の循環資源活用



なおさらにその活動においては、地域社会の幅広いセクターとの協働により環境のまちづくりの大きな部分を担っていきたいとする極めて意欲的なもの、環境の時代に求められる高い見識を含んだものとなっています。老若男女を問わず、わだかまりなく交流の図れる心豊かなコミュニティのあり方が真に当地における地域循環型社会創りを支えてくれると結論して、地域社会の人と人の絆を基本に求める考え方をもって環境のまちづくりの真髄を示す貴重な実践実証的な環境研究となりました。

サステナビリティ学は、その論理が深遠なる哲学を基に今私たちの抱える環境問題の克服には近代文明を通じこれまで捉われてきた既成概念の大転換の必要性を訴える画期的な主張を展開しながら、関連して大変幅広い知識、見識を斬新に示す試みとなっています。そして、環境問題への対応にはその原因となって問題を引き起こす直接要素のみならず、私たちが現在に生きる社会全般に亘ってのあり方、市民の日常生活、経済活動、社会活動に関わり構成する要素全てを包括する幅広いスタンスに立った対応が不可欠であると説いて、きわめて次元の高い深遠な論理を説いています。

本年度は、こうしたサステナビリティ学が主張する論理のなかに、私たちは私たちの主張する環境のまちづくりの論理を土台から支える様々な考え方を学ぶことができました。現在の環境問題は、その規模の大きさと特性を認識したうえで、関連要素の限りない広がりの中、これまで主流として進められてきた個別分野の科学「ディシプリン (Discipline) の科学」ではなく、「マルチディシプリナリー (Multi-disciplinary : 全学的) な科学」を「トランスディシプリナリー (Trans-disciplinary : 超学際的)」な科学として進める必要があると、サステナビリティ学は強調しています。

こうした科学は、これまで科学分野の表舞台に現れなかった「生活世界の科学」、「市民科学」を含めた科学（必要また役立つ知識の創出、生産）の重要性を浮き彫りにするものとなっており、さらにはこれら市民社会から発する科学が環境のまちづくりの主演となってリードする必要があることを示すものとなっています。

4. 2009年度活動報告書

「竹林環境公園」からはじめる持続可能な地域社会創り - 持続可能な地域社会創づくりに向けた考え方の構造を探さぐる -

《 目 次 》

はじめに	2
第Ⅰ部 竹林環境公園のあるまちづくり	4
第1章 竹林環境公園（竹林エコパーク）の造成を検討する	4
1. 竹林環境公園の設計にあたっての想いを整理する	5
2. 公園の設計に向けて備えたい要素を考える	5
3. 公園造成とその後の維持管理に向けてポイントとなる要素を考える	6
4. 公園造成に向けた荒廃竹林の整備方法を検討する	7
5. 「利用しやすさ」を追求した竹林環境公園を検討する	9
6. 住民の参加しやすい公園の維持管理システムを検討する	10
7. 公園運営の収支を含め永続性のある管理体制構築に向けて調査する	11
第2章 竹林環境公園がつなぐ環境のまちづくりを展望する	13
1. 竹林環境公園が生み出す効用を整理する	13
2. 竹林環境公園からつなぐ環境のまちづくりへの道筋を考える	15
第Ⅱ部 環境のまちづくりに向けた思考構造	18
第1章 「環境のまちづくり」を主張する背景にある論理を整理する	18
1. 今日の環境問題がサステナビリティと伴に語られる意味を理解する	18
2. 地域社会として地球環境問題への対応まで求められる意味を理解する	18
3. 環境の時代の「安心・安全」をベースにサステナブルな地域社会を創る	19
4. 環境の時代に求めたい理想の地域社会モデルを考えることから始める	20
第2章 「環境未来都市かしわ」創りに向けた具体的なイメージを描いてみる	22
1. 「てがぬま遊トピア」創り（自然循環準拠循環型地域社会総合開発）をイメージする	22
2. 「ふれあいサイクルタウン」創り（ゆとりの環境文化都市総合開発）をイメージする	23
3. 「先端環境学術都市」創りをイメージする	24
おわりに	26

2006年6月に始めた私たちの市民環境研究会にとり4年度目の活動に入りました。過去3年の活動は、今日に私たちが抱える環境問題への取り組みとして環境のまちづくりを進めることがなぜ必要なのかに対し答えを出すこと、さらにはこの取り組みが環境問題への対応における王道であると私たちが主張する論理的基盤を固める意味がありました。こうした私たちの過去の活動の意味を踏まえて、当2009年度は私たちの主張する環境のまちづくりを進めるためにどのような施策が考え得るのか、有効なものになり得るのかと云った命題に取り組んでみたいと考えました。

このような想いをもって改めて私たちの柏の地域社会が抱える課題を俯瞰するなかで、

当地域内の随所に見られる荒れ放題に放置された竹林に注目しました。地域に多くの荒廃した竹林を抱える現状、厄介ものとも観られてきたこの竹林をむしろ当地での貴重な環境資源にできるとの見方から生み出すアイデアを提起しました。「竹林エコパーク（竹林環境公園）」の造成と云う斬新なアイデアを用いて、当地の経済活動のあり方に一つの新たな施策案の提示を試みました。

こうして、私たちの地域社会を環境の時代に相応しいものに見直すという考えの下に、地域の環境資源の有効活用を持続可能な地域社会創りの体系的な論理に組み入れて発展させる内容を紹介しました。このように私たちの主張を発展させつつ、報告書の後半においては当地における竹林の活用のイメージを膨らませたうえ、環境のまちづくりに反映する考え方を提示しました。

(A) 報告書内容の構成を見る

本報告書では、「はじめに」のなかで本年度の環境研究のメインテーマに「竹林エコパークのあるまちづくり」を据えた意義を環境問題への対応の論理のなかに説きながら、本文を読みやすくするための導入文としました。

本文は第Ⅰ部と第Ⅱ部とに分けて、第Ⅰ部において当地に広く分布する竹林のすべてを環境資源として最大に活かすことを目標に、地域社会のあり方を変えていく仕掛けとしての「竹林エコパーク」造りを実現させることへの想いを巡らせました。環境のまちづくりに至る道筋にまで想いを馳せながら、まずは荒れ果てて放置された竹林の一つを竹林エコパークとして造成したうえ、この公園が生み出す住民のQOL（Quality of Life：生活の質）の向上に寄与するあり方について、私たちのアイデアを出し合って整理しながらまとめました。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で示したような一つの竹林エコパーク造り自体がその地のコミュニティに大きなメリットを生むとともに、このアイデアが地域社会全体にとっても忘れられている環境資源の有効活用につなげ得るとの考え方を提示しました。私たちが最終ゴールを目指す環境のまちづくりの論理を改めて振り返りながら、第Ⅰ部で示した竹林エコパークが地域において竹林環境ビジネスの起業を支援して、地域に環境創造型の産業が育っていつてくれることを展望しました。こうした環境ビジネスが環境のまちづくりの論理と一体となり、整合性と調和をもって私たちの地域社会の持続性を高めていくと云う論理を紹介しました。

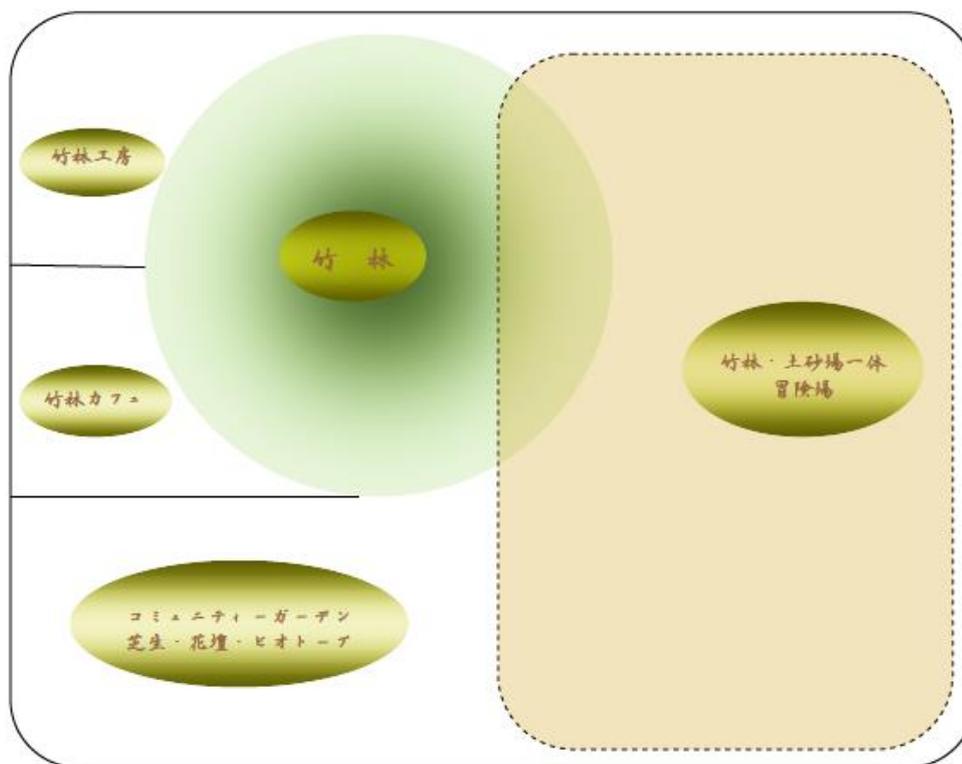
(B) 報告書の主張を顧みる

まずは、このような竹林エコパークの設置と云う考え方が、その地のコミュニティにおいて公園を利用する人々のみならず公園の造成、維持管理などで関与する人たちのQOL

の向上に大変役立ってくれると云う考えを示しました。そして、公園を実際に造成しその後の維持管理に関連する要素へ網羅的に考えを巡らせて、私たちの豊さ追求においてたとえ環境問題への対応の視点を除いたとしても、この竹林エコパークの運営には採算性が見込めるとする論理を示しました。

さらに竹林エコパークが一般的なもの以上に優れて公園としての役割を担えるうえに、地域の竹林エコビジネスの開発拠点となって、当域内に広く荒れ放題に放置されている竹林の整備、活用を飛躍的に進める起爆剤ともすることが期待できると云う論理を説きました。こうして、竹林エコパークの造成というアイデアをもって、当地柏が抱える課題について少し視点を変えることにより、地域社会全体としても多面的に多くのメリットを生む有力な施策になることを説きました。

<造成計画を考えるための竹林エコパークのイメージ図>



また、この施策の実現に考えを巡らせることを通じて、地域社会の変革に向けた具体的な仕掛けにし得る可能性も探ってみました。そして、「竹林環境公園のあるまちづくり」について、具体的な公園の造成を進めるための検討を含めて、環境のまちづくりにつながる先進的な考え方を提案しつつ、関連するさまざまなアイデアの提示を試みました。環境の時代の地域社会の変革に向けた環境のまちづくりにつながる新たな議論を始めたいとして、関連する先駆的な考え方を提示してみました。

続く第Ⅱ部においては、第Ⅰ部に記した実践上の先進的な考え方と関連させて、当地に

おける環境のまちづくりを進めるための思考体系（考え方の構造）について観念の上で発展的に整理することを試みました。

社会の持続性の確保が最優先の取り組みとして浮上した今日の環境問題、私たちの地域社会において単に「環境側面」への対応のみでは環境のまちづくりは進められないことが明確になりました。地域社会で営まれる「経済側面」、「社会側面」を加えた3つの側面を構成する要素を相互に関連させながら発展させる施策を当地柏で展開していきたいと云う主張を新たにしました。そして、このような考え方の有力なモデルの一つとして竹林エコパークを通じて取り組む環境のまちづくりの考え方を提示したことを説明しました。

また、こうした考え方をさらに拡大して、私たちが環境のまちづくりにおいて有力な施策と考えて過去に発展させてきた3つの試案の展開に考えを巡らせてみました。竹林エコパークが地域社会に生み出す環境ビジネスの重要性に関連させながら、社会的に弱い立場に陥る人たちに元気を与える協働集団居住エリアの創出を図る「てがぬま遊トピア」構想をはじめ、当地社会に向けた3つの施策案に本年度での学びを加えながら発展させた論理を示しました。

5. 2010年度活動報告書

持続可能な地域社会創りを考える

- 私たち市民自らの力で拓ひらく希望溢あふれる地域の環境未来 -

《 目 次 》

はじめに	2
第I部 私たちの「環境のまちづくり」の主張を振り返る	4
第1章 環境問題への取り組みを「環境のまちづくり」として進める	4
第2章 環境の時代における私たちの地域社会創りへの想い	5
第3章 環境問題を克服し踏み出す持続可能な私たちの未来の地域社会創り	7
第II部 柏産農産物で市民の年間食卓メニューを作ろう	10
第1章 強い環境意識のなかに育む地域社会の確かな食文化	10
第2章 拡大し続ける国際物流を背景に考える私たちの食の安全保障	14
1. 「質」に加え「量」の側面から総合的に探求する私たちの食の安全保障	14
2. 「水」の大切さと伴に考える食の安全保障	16
第3章 地域特性を背景に私たちの想いをもって考える食の安全保障	21
1. 地域特性を生かした地産地消による食の安全保障を考える	21
2. 私たちの地域の食文化のなかで育む「食育」を考える	22
3. 環境の時代の当地の食文化づくりに向けて考える地産地消の農作物	25
おわりに	33

5年目に入った2010年度の私たちの活動報告書は、節目の年の研究活動を意識して改めて環境問題への対応を持続可能な地域社会創りとして進めたいとの悲願を示めすものになりました。また、世界的にも「スマートシティ」造りが環境問題への取り組みとして多く聞かれるようになってきたなかで、私たちの暮らしに係る要素全体を包括的に捉えつ

つ環境問題へ取り組む考え方が重要視されるようになってきたことを訴えました。

私たち地域の市民環境研究会は、地域の小さな活動ながらもグローバル（Global；全球的）な動きを含む社会全体の動きを俯瞰しながら、持続可能な地域社会創りの論理を弁証法的に発展させてきました。こうした当年度における私たちの活動は、環境のまちづくりに係る論理をさらに足元から見つめ直して発展を試みつつ、この論理のなかで取り組みの大きな柱の一つとして主張してきた「食料安全保障」に関連する考え方について、私たちが生きる生活世界の目線をもって幅広く考えを巡らせながらの調査研究となりました。

図 当地柏に地産地消の食文化を育む



(A) 報告書内容の構成を見る

当年度の報告書の「はじめに」では、環境問題の本格的な解決に向けては問題の本質を捉えることの大事さを強調しつつ、環境のまちづくりに取り組むことの大事さを改めて訴えました。こうしたなかで、地域の食の安全保障に市民社会の積極的な参加を説いたその後の本文の内容を紹介して、読者が報告書本文に入りやすい導入としました。

そして、本文は第Ⅰ部と第Ⅱ部の2部構成としました。この第Ⅰ部においては私たちが幅広い分野の要素に関連して様ざまに環境問題の影響が拡大するなかで、既存の発想に観られがちな個々の問題へ個別に対応するやり方では今日に私たちの抱える環境問題の根本的な解決は望めない、「部分最適」以上に「全体最適」の思考形態を重視しながら環境問題へ対応して行かなければならないとの論理を強調しました。

こうして、当地において私たちが目指したい生き方、ライフスタイル、日常の生活から産業活動、社会活動に至る全体を包括した姿を描いたうえ、地域社会における社会的合意の形成を図りながら、環境のまちづくりに向けた大きなムーブメントへの社会的意思決定を進め、行動につなげていきたいとの主張を展開しました。

続く第Ⅱ部では第1章から第3章までの3つの構成を採って、「柏産農産物で市民の年間食卓メニューをつくろう」とのテーマを掲げて、環境の時代に当地の伝統と風土を生かし

た食文化の形成に想いを巡らせました。3つの章をもって、今後は環境意識を強くもちながら当地の食文化のあり方を探求していくことの必要性、国際物流が拡大し続けるなかでの食の安全保障の考え方、当地の地域特性を生かした食のあり方について、当地における農産物の種類についての調査を並行して進めながら、私たちの考え方を示しました。

図 食事のバランスガイド



出典：農林水産省HP

http://www.maff.go.jp/j/balance_guide/b_koma/about/01.html

② 報告書の主張を顧みる

今回の報告書は、背景となる環境のまちづくりの論理の本質との関連を確認しながら、この論理のなかで大きな柱の一つとして主張する当地の食の安全保障のあり方について、幅広い視点からの私たちの考え方を提示してみました。

母なる大地、大きな地球の存在に甘えて、その自然からの恵みを限りなく^{むさぼ}食^るの生き方を

続ける現在の私たちですが、食を含めた様々な物質の供給に地球規模の限界が浮き彫りになってきたことへの認識を新たにしました。そのうえで、環境意識をもって新たな地域の食のあり方、食文化を醸成しつつ当地の食の安全保障を確立していきたいと訴えました。

グローバル（Global：地球規模）に物流が拡大するなかで食物への有害物質の混入の問題、また温暖化などの環境問題が引き起こす水不足や食料生産の減少と云う問題から食の「質」と「量」の双方に係る安全、安心の確保が大変重要になりました。さらに、食料が地球の裏側からも運ばれて来るようになった現状は、こうした物流に費やされるエネルギー資源や輸送に際する温室効果ガス CO2 の排出が環境問題を深刻化させることに懸念が高まっています。

‘モノ’の「種類」および「量」における豊かさを追求し続けて、ひたすら国際的な物流の拡大を通じて「飽食の時代」を築いてきた私たちですが、本格的な環境の時代を睨んで私たちが地産地消をベースにした食の安全保障を考えるなかで、柏産農産物により市民の年間食卓メニューを作ることを進めたいとの主張を展開しました。

また、こうした私たちの地域の食の安全保障は、環境のまちづくりを進めるなかで地域社会の持続性の確保、市民が主導する真の民主社会の成熟が併行して進むなかで達成されていくものである、との見識を示しました。

6. 2011 年度活動報告書

私たちの地域社会が進める「環境未来都市かしわ」創り

- 「サステイナブルな地域社会創り」に向けた論理の基本を振り返りつつ -

《 目 次 》

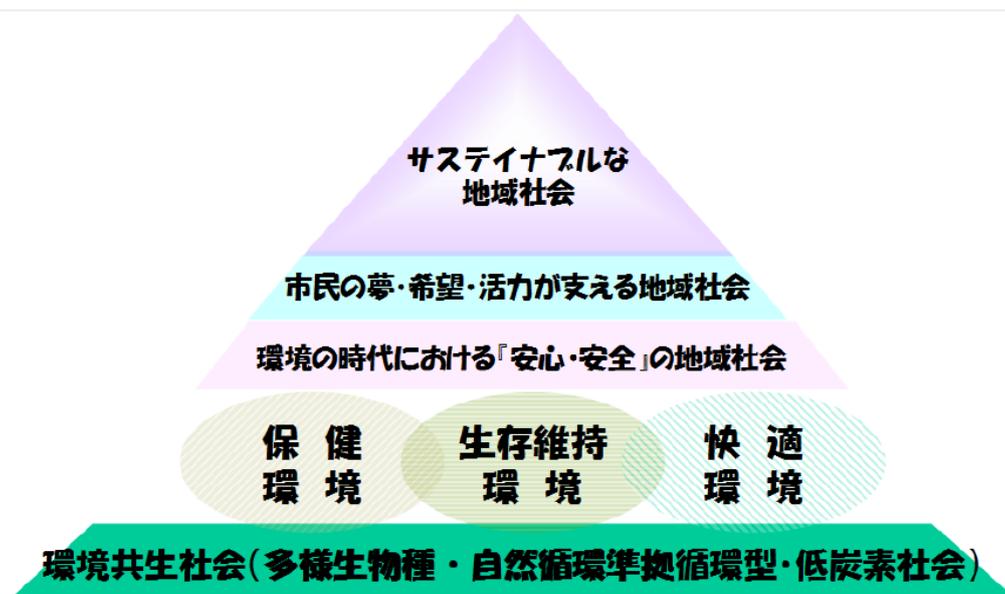
はじめに	3
第 I 章 私たちの「環境のまちづくり」の論理を振り返る	5
第 1 節 改めて私たちの「環境思想」を振り返る	5
第 2 節 環境問題の意味とその取組みのための考え方を振り返る	9
第 3 節 私たちが提示する「環境未来都市かしわ」の考え方を振り返る	17
第 II 章 環境リスクマネジメントを踏まえて考える環境のまちづくり	21
第 1 節 今日の社会に観る環境問題の理解についての危うさ	22
第 2 節 産業活動において先行したリスクマネジメント	24
第 3 節 企業が進めるリスクマネジメントの展開に学ぶ	26
第 4 節 今日の環境問題において拡大するリスクへの対応	28
第 5 節 環境対応における特徴を捉えて進める環境リスクマネジメント	31
おわりに	35

私たちは、今日に私たちが抱えて深刻化が止まない環境問題の本質を捉えることにより、環境問題の本格的な解決を目指したいとして、持続可能な地域社会創りと云う究極的なテーマを掲げる市民環境研究会の活動に取り組んできました。

過去、この環境のまちづくりの論理を足元から見つめつつ論議を通じ発展させることを試みてきましたが、本年度の活動においては環境問題を発生させる根源の意味にまで遡^{さかのぼ}っ

て私たちの論理の‘深化’、そして‘進化’に挑戦したいとするものとなりました。すなわち、現在の環境問題は私たちが豊かさを求めて巡らせる思考のあり方に問題を生み出す根源的な原因があるとして、さらにはこうした私たちの思考の様式、思考の形態、思考する対象の枠組みに正しいものを見いだせない限り今、私たちの抱える環境問題に対する本質的、本格的な解決は望めない、根治療法としての処方箋は描けないとの考えを示しました。

図 環境の時代に私たちが探求する持続可能な（サステイナブルな）地域社会



こうして2011年度の私たちの報告書は、私たちが環境の時代に備えたい思想、環境問題へ取り組みにおける考え方、ゴールに描く環境未来都市に係る考え方についての関連づけを行って、私たちの考えを提示するものになりました。

また、こうした思考を展開するなかで環境問題への対応として「環境リスクマネジメント」の概念を活用することが中心的、また鍵になる考え方になるとして取り上げて、これまで学術およびビジネスの実践を通じて培われてきたリスクマネジメントの知見に深く理解を巡らせながら、私たちが主張したい論理の発展を試みました。

(A) 報告書内容の構成を見る

2011年の年には、私たちが当地柏で市民環境研究会の活動を続けるなかで環境史の上に残る2つの大きな出来事がありました。報告書「はじめに」の欄において、東北大震災に伴う福島第1原発からの放射能汚染と云う環境事故と、当地柏が世界レベルで先進的に進めるとする「環境未来都市」創りの対象地域として国から指定を受けたことを振り返りました。このことは、私たちの活動の意義を深く見つけ直すきっかけとなり、環境問題

への対応を環境のまちづくりとして進めることの重要性を改めて訴える機会としました。

この冒頭の導入文をベースとしながら、続く本文を第1章と第II章に分けて環境問題への対応、持続可能な地域社会創りの論理について、過年度に積み上げてきた論理をさらに根源的な意味合いにまで掘り下げたうえで進化させることへの挑戦を試みました。

第1章において、私たちが環境問題を歯止めなく拡大させ続けている根本原因を、私たちが豊かさを求めて抱く価値観、私たちが生きるうえで持つこうした価値観に基づく思想、思想に基づき豊かさを求めて巡らせる思考のあり方に係る欠陥や間違い点にまで掘り下げて、環境のまちづくりに係る論理の発展を試みました。

第II章は、このような環境問題へ対応するための私たちの思考のあり方において、環境問題の特性から「環境リスクマネジメント」の考え方が重要な鍵になる概念の一つとして、関連の知識を整理してみました。

既に環境問題は私たちに幅広い分野で大小さまざまな不都合を私たちに与えるようになりましたが、今日になおその深刻化に歯止めをかける目処を立てられない私たちには、将来に亘って一層厳しい不都合、人類社会の崩壊と云った究極的な意味までを含むリスクを抱えるに至ったことが重大な懸念となりました。私たちが今日抱える環境問題は、将来に亘ってどれほどの規模の打撃を何時、どの場所においてどのような形態をもって私たちに与えることになるのか、私たちの知的能力をはるかに超えて結果を正確に予測することをとて難しいものにしてしまいました。しかしながら、こうした将来に起こり得る不都合への対応についても最善を尽くす以外にないとして、その考え方を環境リスクマネジメントの概念をもって提示を試みました。

② 報告書の主張を顧みる

私たちは、地球からの恵みを受けることにより近代文明の発達を通じて私たちが生きるうえに資する価値を大量に生み出すようになりました。この結果、私たちの今日の文明は地球の恵みとしての環境資源を食いつぶすようになり、環境資源の枯渇の問題は私たちの生存すら脅かす究極のリスクを生み出す重大な要因となりました。

現下に環境問題が深刻化するなかで、問題の克服に向けて様々な思考錯誤が世界中で進められています。こうした人類社会を挙げた努力が進められるなかで、私たちの生きることの全般に関わり深刻化する今日の環境問題の解決のためには、私たちの思考のあり方までを省みて知識を生み出す過程における欠陥、過ちを反省し、これまで流の考え方の転換を図っていく必要があるとの主張が大きくなってきました。また、そもそも思考を巡らせて生み出す価値に関しても、私たちがこれまで追求してきた価値が環境の時代に本当に創出するに値するのか、必要としても対象となる価値がそれ程の量を必要とするものであるのか、私たちの価値観、価値基準についても根本に遡っての見直しが必要になりました。そして、こうした価値観を支える私たち生きるうえにもつ思想についても、改めて振り返

ってみることが大変重要となりました。

今日、社会の様々な分野において各々固有の科学（価値を生み出すための知識の創出、生産）が急ピッチで進み、「爆発する知識の時代」とも称されるようになりました。このような知識の洪水が渦巻くなかに生きる現在の私たちは、各分野に独立して生み出された知識が最終的に社会に集まった時、私たちはこれらの知識のもたらす結果をコントロールする能力を急速に失ってしまっています。この結果、今日の環境問題を典型例として私たちの社会は大量の要素が複雑に絡み合った、解決の難しい深刻な問題を数多く抱えるようになりました。

こうした環境問題の取り組みのためには、私たちはかつてマイケル・ギボンズが提唱した第2の思考様式で進める科学、「モード2の科学」を活用することが大変重要であると主張しています。これまでは、個々の分野において独立的に論理の深化が進む第1の思考様式をもって進める科学、「モード1の科学」がリードして私たちが必要とするまた役立つための知識の創出、生産が図られてきました。しかしながら、持続可能な社会創りとして環境問題の取り組みを進めるうえではむしろモード2の科学がリードしながら、具体的な行動においてモード1の科学を活かしていくべきとの考え方を、私たちは主張する論理の基盤に据えてきました。

そして、モード2の科学をベースにして環境問題を科学していくなかで、問題が生み出す事故発生のタイミング、発生した事故の展開の予測、予想される被害の種類、問題自身についての形および拡大するスピードと規模、そしてなにより人類の生存すら危うくするまでに深刻化したリスクを含む環境問題の重大さを改めて振り返ったとき、環境リスクマネジメントの知識を活用して科学することが大変重要であることを説きました。

さらに、環境問題と云う問題の規模の大きさともに、問題を発生させる要因が私たちの日常生活、経済活動、社会活動のあらゆる要素に関連して広がり、また現在のみならず将来の世代に対しての責任を負って時空を超えてあるべき公共性を担保すると云う、究極的な広がりのあるテーマを私たちは対象としなければなりません。このため、今日に私たちが抱える環境リスクへは、持続可能な社会創りのレベルの概念をもって以外に問題解決のための方策はない、とする論理を強調するものとなりました。

7. 2013 年度活動報告書

市民社会の想いと覚悟で進める「環境未来都市かしわ」創り

- 「市民参加の環境監査」が導く持続可能な地域社会への道筋を考える -

《 目 次 》

はじめに	3
第1章 「市民参加の環境監査」で創る私たちの「環境未来都市かしわ」.....	5
第1節 「持続可能な地域社会」創りに向けて「市民参加の環境監査」への期待	5
第2節 「市民参加の環境監査」で進める私たちの「環境未来都市かしわ」創り.....	7
第3節 「市民参加の環境監査」導入により「私たちの市行政」に対して膨ふくらむ期待.....	9
第2章 「市民参加の環境監査」の導入を考える	13

第1節 私たちの身近になりつつある「監査」による「組織活動の継続的な改善」	13
第2節 「市民参加の環境監査」を先駆的に進めるわが国の「環境自治体会議」の組織	15
第3節 環境自治体会議が取り組む市民参加の環境監査「LAS-E」の制度に学ぶ	18
おわりに	21
参考資料	

今日私たちの抱える環境問題の本質を求めるために、私たちは過去7年間の活動を通じて問題の原因を根源にまで遡り探求しつつ近代文明のあり方、文明を支える科学のあり方に係る欠陥をまでも含めて、幅広く論理を展開し積み上げてきました。

8年度目になる本報告書は、こうして過去に積み上げた論理を生かして環境未来都市創りと云う大きな目標に向けて地域社会を動かすために、実際にどのような手段を考え得るのかについて私たちが巡らせた考えを紹介するものとなりました。

こうした報告書のなかで、私たちが将来に向けて目指す持続可能な地域社会創りには、当地の市民社会の役割が決定的な意味をもつと説きました。そして、「市民参加の環境監査」を市政に導入することがこの意味を生かす大変有力な手段、また地域社会の革新に向けた有力な仕掛けになるとして、この取り組みの意味、環境未来都市づくりに期待される役割、導入後に描けるシナリオなどを紹介しました。

また、市行政など組織が監査を採用することのメリット、他の地方自治体で展開されている市民参加の環境監査の内容などを紹介しながら、当地の市政にも導入したいと考えた背景を説明しました。

(A) 報告書内容の構成を見る

「はじめに」において、現状の環境問題を俯瞰しながら持続可能な地域社会創りを急ぎたいとする意味を改めて振り返って、本年度のテーマに取り上げた市民参加の環境監査との関係を説明することにより、続く本文に入るための導入としました。

本文は、第1章と第2章の2章立て構成としました。第1章において市民参加の環境監査が環境未来都市創りに向けて社会的合意の形成を担う役割など、取り組む意味の大きさを説きました。そして、私たちが提案する環境未来都市かしわ創りのシナリオを示しつつ、このシナリオのなかで市民参加の環境監査の役割にイメージを膨らませたうえ、市政に監査導入後に市長、市職員および私たち市民が享受できるメリットを示しました。

第2章では、前第1章に私たちの市政に市民参加の環境監査を導入したいと主張した内容を補強するために、関連する外部の動きを紹介しました。組織において監査が持続して組織活動の効果的なレベル向上に寄与している状況を紹介しました。そして、わが国において先駆的に進められている市民参加の環境監査の制度、「LAS-E制度」を紹介しながら、

「市民参加の環境監査」で進める 環境のまちづくり



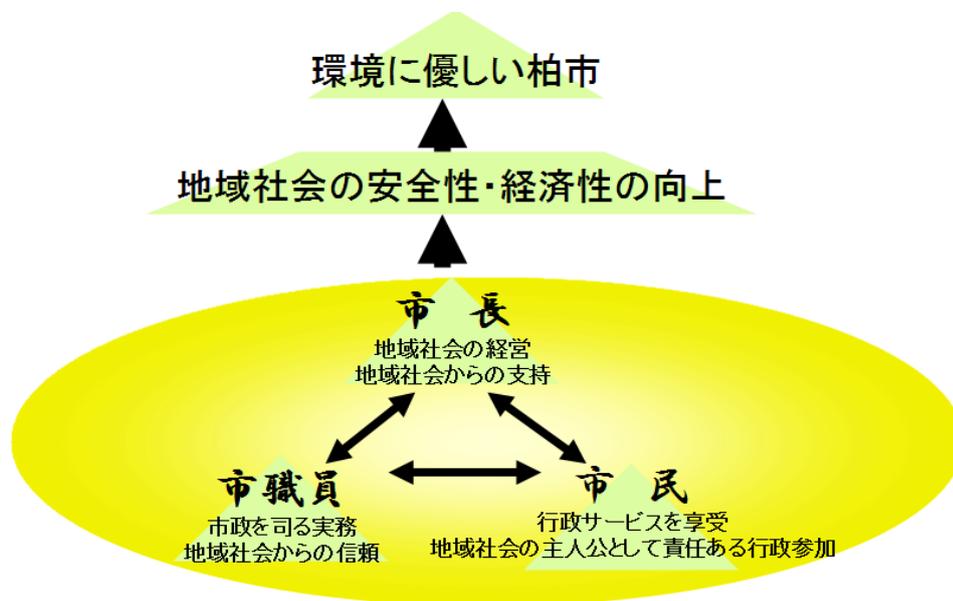
この制度を運営している環境自治体会議の活動について紹介しました。

② 報告書の主張を顧みる

私たちは、環境問題の克服、持続可能な地域社会創りに取り組む意味を正視し、徹底して問題の基本に遡りながら深く探求を続けてきました。こうした私たちの結論は、私たち市民の「夢と希望に支えられた志としての『想い』および実現に伴う責任としての『覚悟』」こそ、環境未来都市かしわを実現するために決定的な意味をもつとするものです。

私たちが繰り返してきた主張、地域社会における環境問題の解決さらに持続性の確立は、「環境未来都市かしわ」創りを通じてこそ実現が可能であるとしてきました。そして、この環境未来都市創りは、私たちの生活や経済社会活動のソフト面から都市インフラのハード面に至るすべての要素に相互の関連性を考慮しながら新たなあり方を求めると云う、壮大な社会変革を意味しています。このような文明史レベル、歴史的な取り組みを進めるためには、私たち市民の「想いと覚悟」を集約した「社会的合意」を形成し、「社会的意思決定」を効果的に進めることが不可欠であることを説きました。

図 「三方一両得」で進める「市民参加の環境監査」

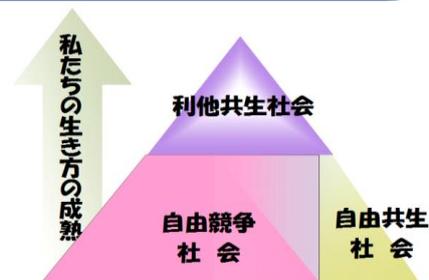


私たちは、市民参加の環境監査の運営に直接に関わる当地の市長、市職員、市民の三者ともにこの監査への取り組みを通じて得られるメリットを「三方一両得」と表現しながらその有効性を強調しました。そして、こうした監査に直接関わる者へのメリットのみならず、その成果は地域全体へとつながって、私たちの夢と希望を載せた環境未来都市創りを理想的に進めることができるとする論理を説きました。

そして、こうした市民参加の環境監査は私たちの「環境未来都市かしわ」創りを進めるうえで基本となる下欄に掲げる考え方の確立を強力に支援するものになることを説きました。

「環境未来都市かしわ」創りを進めるうえで基本とする考え方

1. 今日私たちが抱える環境問題と云う問題の大きさ、特性、原因と結果に係る関連要素の広がり、問題がもたらす深刻さに見合った取組みを考える
 2. 地域社会のあり方についての長期展望を基に、私たちの暮らし、経済活動、社会活動、社会インフラおよび思想の全てにおける構造的な変化までに想いを馳せながら、最大確かな成果（地域社会において時空をまたぐ全体最適達成）を得ていくための最良の施策をもって取り組む
 3. 現在の「自由競争社会」から「自由共生社会」さらに『利他共生社会』までものゴールを見据えた思想を地域社会に醸成する
 4. 関連する地域社会を構成する全ての要素に係る変化に向けた市民社会の「想い（夢・希望）と覚悟（責任）」を育みながら進める
 5. ‘ねばならない（避けられない責務）’の到着点に対する覚悟を備えながらも、そのゴールに向けて最大限に自然体のアプローチを可能にさせる知恵を地域社会全体で創出する
 6. 実施する施策は、地域社会で‘産官学民政’が五位一体となって協働し、総力を挙げて今後、私たちにとって最大の課題となる‘持続可能な地域社会（環境未来都市かしわ）創り’“に取り組む
 7. 持続可能な地域社会創りに向けた環境問題への各種の取り組み、低炭素社会づくり、循環型社会づくり、廃棄物対策、有害化学物質対策、放射能汚染対策、生物多様性保全対策や資源枯渇対策ほかは相互に有機的な関係（関連性、調和、相乗効果）を考えながら進める
 8. これから取り組むべき真の住民自治による地域社会統治の確立に有機的な関連性をもたせつつ進める
 9. エコアクション（個別の環境行動）レベルにとどまらず、地域社会のエコガバナンス（環境統治）、エコマネジメント（環境経営）を含めて、これら取り組みに係る3つの階層概念が同一の志向性を備えた一貫性のある体系化されたものとして進める
 10. 長期的な計画を含めた着実な地域の環境計画を策定したうえで進める
 11. 計画達成に向けては、自然科学分野のみならず社会科学分野における進歩、技術革新を強く意識して進める
 12. 循環型社会づくりについては、自然循環へ準拠した物質循環の最適までをゴールに描いて進める
 13. 温暖化対策については、地域の持続可能なエネルギーの確保（エネルギー安全保障）の視点を基盤に据えて進める
 14. 取り組みは、人類社会より国家社会、国家社会より地域社会（基礎自治体）が責任をもって主導していく姿勢により進める
 15. 持続可能な地域社会づくりは責任を備えた市民社会が主導して進める
 16. 持続可能な地域社会づくりは、産業技術、科学技術、学術、行政手法や政治手法ではなく、「生活世界で健全に育まれた感性」が主導するものとして進める
 17. 計画から活動の実施まで、関連情報が地域社会に広く開かれて高い透明性が確保されたなかで進める
- 以上



おわりに

私たちの活動が2016年6月に満10年を迎えるこの時期に、本報告書をもって私たちの過去の市民環境研究会の活動全体を振り返って、環境問題を克服したうえ私たちの柏に持続可能な地域社会を実現したいとして積み上げた各種の論理をご紹介します。

さまざまな分野において各種の環境問題を抱えるに至った私たちですが、昨今の世界的な異常気象から一般市民の肌感覚からも尋常でない困難が予想されるようになった地球温暖化問題など、私たちの社会の持続性を脅かす各種問題に対して本格的な対応が急がれるようになりました。

こうした今日に私たちの抱える環境問題は、幅広く私たちの日常の暮らしから経済社会における活動に至る全てに関わり発生したうえ、これら全般において遠くない将来にも私たちに深刻な打撃を与えようとしています。

そして、私たちが将来への豊かさを求めこれまでと同じやり方による努力を続けるのみでは、環境問題が私たちに深刻な損失を生み出す可能性、すなわち「環境リスク」を拡大させる一方の流れを反転させる見通しが立たないことも明白となってきました。

本報告書を通じて、私たちはこれから本格的に向かう環境の時代において私たちの当地における暮らし、経済社会活動、さらにこれらを支える基盤となる社会的インフラのあるべき姿を包括的に描いた「環境未来都市かしわ」像を提示して、その実現に向けて幅広い視点から体系化した論理の提示を試みました。

私たちが本報告書を通じて訴えた論理は、地域全体として私たちの日常生活、経済社会の営みを通じて与える環境への負荷を最小化すると共に、自然が営む能力を増強して最大化を図ることのできる当地柏の地域社会を実現したいとするものです。

この私たちが主張する論理の正しさを立証的に皆さんに説きたいとして、近代科学における不備・欠陥に考えを巡らせつつ、これまでの思考の大転換の必要性にまで言及しました。既存の学術分野の縛りを大きく超えて、「超学」とも呼べる新たな科学を通じて、環境問題の克服と持続可能な地域社会創りを進めることが必要と訴えました。

今日の環境問題の解決には、こうした過去の歴史に例を観ない大きな取り組みが必要です。私たちはこうしたテーマに先進的、先駆的に取り組みたいと活動してきました。ここからは、本報告書の内容をたたき台として当地柏の市民社会で大いに論議していただき、真に私たちが希望を持てる「環境未来都市かしわ」実現に向えることを強く希望します。

2016年3月31日

かしわ環境ステーション 温暖化対策部会
環境未来都市研究分科会
代表 福井 信行

かしわ環境ステーション 環境温暖化部会
環境未来都市研究分科会

《 ワークショップほか 2014年度・2015年度の主な活動の履歴 》

#	活動年月日	ワークショップほか活動内容
1	2014年4月12日	前年度研究活動の総括と年次報告書のまとめについて論議ほか
2	2014年5月10日	前年度研究活動の総括と年次報告書の最終確認作業ほか
3	2014年6月14日	市民環境監査の学習および市民環境研究活動の展開の論議ほか
4	2014年7月12日	環境未来都市創りの研究活動のあり方の論議ほか
5	2014年9月13日	環境未来都市創りへの理解を市民社会へ広める方法の論議ほか
6	2014年10月11・12日	「環境政策課題研修」への参加
7	2014年10月18日	当地柏における環境未来都市創りの進め方についての論議ほか
8	2014年11月15日	本年度の研究活動の中間総括と今後の展開についての論議ほか
9	2014年12月13日	KKS環境勉強会の実施計画および環境未来都市推進施策の論議ほか
10	2015年1月14日	KKS環境勉強会の準備および環境未来都市推進施策の議論ほか
11	2015年1月15日	「持続可能性・幸福度指標シンポジウム」への参加
12	2015年2月25日	活動報告書作成計画と関連する環境未来都市創りに係る論議ほか
13	2015年2月28日	「持続可能な地域社会づくり」をテーマとするKKS環境勉強会の実施
14	2015年3月18日	本年度活動の総括と年次活動報告書作成計画の論議ほか
15	2015年4月15日	当地柏の環境未来都市創りに向けた研究活動のあり方の論議ほか
16	2015年5月20日	外部環境研修会開催への準備と社会の環境経営についての論議ほか
17	2015年5月31日	環境カウンセラー千葉県協議会における環境研修会開催
18	2015年6月17日	実施研修会の結果分析を通じた環境未来都市創り推進に係る論議ほか
19	2015年7月15日	環境未来都市創りの論理体系づくりの論議ほか
20	2015年9月7日	ソーラーシェアリング事業の現地視察
21	2015年9月16日	環境未来都市創りの論理の発展方法についての論議ほか
22	2015年10月21日	年次報告書のまとめに向けた論議と環境シンポジウム開催の検討ほか
23	2015年11月18日	環境未来都市創りの論理のまとめと公開環境勉強会の検討ほか
24	2015年12月16日	環境未来都市創りの論理の確認と年次報告書のまとめの論議ほか
25	2016年1月20日	年次報告書のまとめと今後の活動展開についての論議ほか
26	2016年2月17日	環境シンポジウム対応、年次報告書まとめ、活動計画の論議ほか
27	2016年3月16日	環境勉強会計画、年次報告書完成、今後の活動展開の議論ほか

2014年度・2015年度 環境未来都市研究分科会参加者（敬称略）

- 大沼 隆
- 亀田 玲
- 齋藤 秀明
- 新屋 沙織
- 豊田 美奈子
- 福井 信行
- 福岡 英寿
- 松崎 延壽
- 山本 昭彦
- 湯浅 光一

以上10名(五十音順)